ISSN 0918−9904

窪田大垣内遺跡（第１次）発掘調査報告

研究紀要第18－５号

2009（平成21）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は、三重県教育委員会が、主要地方道津関線道路改良事業に伴い平成５年度に実施した津市大里窪田町に所在する窪田大垣内遺跡の第１次埋蔵文化財発掘調査の結果を再整理し、報告するものである。

2　調査は下記の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

主事　服部芳人　　臨時技術補助員　山口順也　　研修員　船越重伸

3　報文執筆は服部芳人、山口順也、河北秀実が担当し、全体の編集は服部芳人、河北秀実が担当した。

4　地図及び遺構実測図は、国土調査法の日本測地系による第Ⅵ系座標を基準とし、挿図の方位は座標北を示している。なお、当遺跡周辺の磁北は平成６年現在で、座標北からＮ６°40′Ｗ振れている。

5　遺構埋土及び土層の土色、土質は肉眼観察による。

6　遺構表示略記号は下記のとおりである。

ＳＨ　竪穴住居　　ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＥ　井戸

ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　Ｐ(Pit)　柱穴、小穴

7　遺構番号は、現地調査時の番号を使用しているが、本書では主な遺構のみを掲載した。

8　木製品の樹種同定は、パリノサーヴェイ株式会社による。

9　本書で報告した記録図面類、写真及び出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管・管理をしている。

本文目次

例言
目次
Ⅰ　前言……（服部芳人）…1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の方法……2
　3　調査日誌（抄）……3
Ⅱ　位置と環境……（服部芳人）…4
　1　位置と地形……4
　2　歴史的環境……4
Ⅲ　層序と遺構……5
　1　A地区……（服部芳人）…5
　2　B地区……（服部芳人）…16
　3　C地区……（山口順也）…22
Ⅳ　遺物……25
　1　A地区の土器・土製品……（服部芳人・河北秀実）…25
　2　B・C地区の土器……（服部芳人・河北秀実）…41
　3　瓦……（服部芳人）…42
　4　木製品……（服部芳人・河北秀実）…47
Ⅴ　結語　……（服部芳人・河北秀実）…49

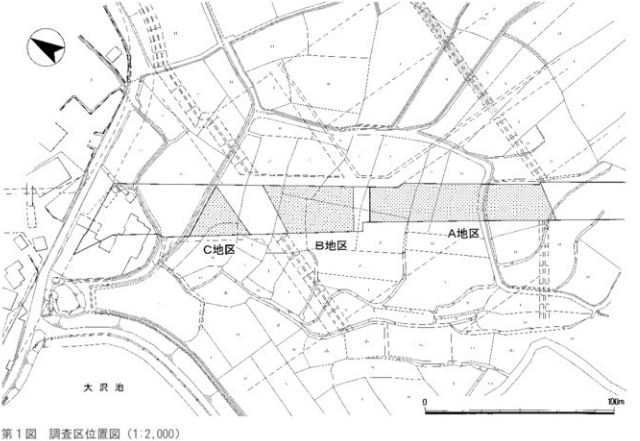
Ⅰ　前　　言

1　調査に至る経過

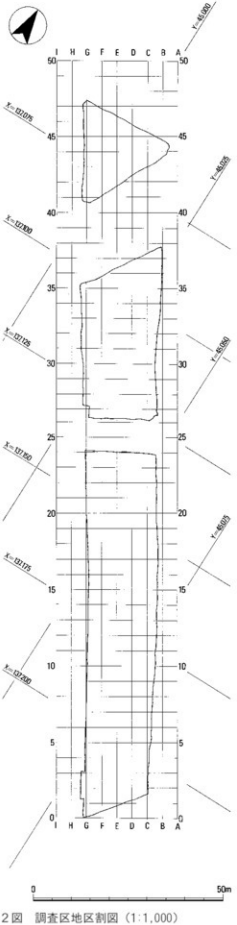
県道津関線は、亀山市関町から南東方向に県庁所在地である津市の北部白塚町に至る道路で、県道番号は10号とされている。この道路は、江戸時代に整備されたいわゆる伊勢別街道[1]とほぼ重複する。近年、津・松阪方面への通勤道路としても利用され、特に国道23号との合流する白塚町周辺は、非常に交通渋滞の激しいところでもある。そこで、この交通の緩和と一般国道23号中勢バイパス（中勢道路）へのアクセス道路の機能を兼ねた道路の建設が計画されることとなった。また、三重県総合文化センター建設も関わって早期完成の必要に迫られていた。この道路改良事業は、県庁の西から北西方向に大里窪田町字橋垣内地内までが先行して行われ、発掘調査は平成４年度に橋垣内遺跡[2]の本調査計4,000㎡とトレンチ調査を実施した。窪田大垣内遺跡の本調査対象面積は最終的には5,850㎡となったが、平成５年度は第１次調査として3,150㎡の本調査を実施した。なお、残り2,700㎡は、平成８年度に第２次調査[3]、平成９年度に第３次調査[4]として実施している。

窪田大垣内遺跡は、行政上は大里窪田町字池の下に所在する。平成２年度に実施した県道津関線道路改良事業に伴う分布調査で新しく見つかった遺跡である。遺跡の名称は、小字名をつけることを原則としているが、分布調査時点で字大垣内を中心として遺跡の広がりが想定され、平成３年度に実施した試掘調査および今回の本調査においても大垣内遺跡の名称を踏襲した。なお、字大垣内地内では平成元年度に津市教育委員が安養院跡[5]の発掘調査を行っている。今回の調査は、字池の下地内ではあるが、大垣内遺跡として報告する。

発掘調査は平成５年５月６日から開始し、12月16日に現地での調査を終了した（次年度以降調査の試掘調査を含む）。半年以上の長期にわたる期間中、冷夏・長雨・台風の襲来など調査に支障をきたす場面がたびたびあった。特に降雨のたびに調査区壁が崩壊したり、航空写真測量の日程が１か月以上も延期した。また遺構保存のために土のう袋・ビニール



第１図　調査区位置図（1:2,000）



第２図　調査区地区割図（1:1,000）

シートを使用したが、その上げ下げなど作業に従事していただいた地元の方々には大変な御苦労をおかけした。

2　調査の方法

今年度の調査区は、総延長約200mに及び、その間にほぼ直交する排水溝、農道などが走る。そのため南からＡ・Ｂ・Ｃと３地区を設定し、Ａ→Ｂ→Ｃ地区の順で調査を行った。調査面積はＡ地区2,000㎡、Ｂ地区850㎡、Ｃ地区300㎡である。調査範囲が道路建設部分に限られ、また南からは道路整備が行われていることもあり排土の置場に苦慮した。Ａ地区の排土をＢ地区に、Ｂ地区の排土をＡ地区にと、いわゆる打って返しの方法を採らざるをえなかった。しかし、幸いにもＡ地区からＣ地区にかけての道路センター杭が一直線であったため、そのラインを基準線として４ｍ×４ｍの小地区を設定した。各小地区には、基準線に直交して数字、基準線に沿ってアルファベットを与えた。なお、各小地区の南東隅の杭をもってその名称とした。

発掘作業は、表土をバックフォーで除去し、その後は人力によって遺物包含層掘削及び遺構検出を行った。その際、ベルトコンベアを東側に直列に並べ南からＬ字状に継ぎ足すことで１グリッドずつ遺物包含層掘削及び遺構検出を繰り返し行った。排土の置場には悩みはしたが、遺構の検出など１日１日の作業はスムーズに進むことができた。

調査面積が広いこともあり、航空写真測量によって遺構全体の図化を行った。個別の遺構については必要に応じて20分の１および10分の１の図を作成しポイントを航空写真測量に落とすことで合体を図った。航空写真測量は、前述のように打って返しの調査であったため、Ａ地区が８月23日、Ｂ・Ｃ地区が10月26日と２回にわたって行われた。その際、前年度調査の橋垣内遺跡Ａ地区との合成のため三重県境界杭（赤杭№１、２）を基準にして国土座標を算出した。また、次年度以降調査に関わって調査予定地外に３点国土座標値を落とした。

Ａ地区の航空写真測量の予定は、７月27日であったが、降雨に祟られ１か月以上も実施が遅れてしまった。このため、何度となく水抜き作業を行い、

遺構の大きさ・深さが多少変わってしまった感がある。この教訓を生かしＢ・Ｃ地区においては土のう袋で、特に柱穴はその保護に努めた。ただし、径50～60cm程の柱穴でさえ５～６袋が必要で、航空写真測量前に取り除く作業は非常に辛いものがあった。しかし、水が溜まることを防ぎ、遺構の形を崩さないためには、有効な方法であった。

出土遺物は、必要に応じて出土状況の実測及び写真撮影を行い、地区・遺構別に取り上げた。その後、埋蔵文化財センターへ搬入し、実測・写真撮影等室内での整理作業を行い、保管した。

３　調査日誌（抄）

５月６日	Ａ地区バックフォーで表土除去
５月７日	井戸１基を確認
５月10日	道具の搬入・地区の設定
５月13日	Ａ地区表土除去が終了
５月17日	作業開始・排水溝作り
５月19日	東壁断面図作成
	ＳＤ１より軒丸瓦出土
５月21日	ＳＤ６より木製品出土
	包含層より緑釉陶器片出土
５月25日	ＳＤ６木製品出土状況図作成
	ＳＤ１より円面硯出土
５月26日	ＳＤ６完掘
５月28日	ＳＥ11輪郭検出
６月１日	ＳＥ11より「池」墨書土器出土
	ＳＤ１より土馬出土
６月２日	ＳＥ11より「饗」ヘラ書土器出土
６月３日	ＳＥ11より木製品出土
６月４日	ＳＥ11より櫛出土
６月10日	南側排水溝より軒丸瓦出土
	（ＳＤ１上層にあたる部分）
６月11日	ＳＨ26平面図作成
６月15日	ＳＢ106・107検出
６月21日	ＳＫ35検出
６月25日	ＳＢ110検出
７月６日	Ｅ24ピット１より墨書土器出土
７月９日	ＳＢ110写真撮影
７月13日	航空測量のための現地説明会
７月16日	航空測量入札
７月27日	雨のため航空測量中止
８月１日	Ａ地区現地説明会
８月６日	プレハブ移転
８月17日	Ｂ地区バックフォーで表土除去
８月23日	Ａ地区航空測量
８月26日	Ｂ地区の地区設定
８月30日	Ｂ地区の掘削作業開始
９月９日	台風のためプレハブ浸水間近
９月16日	ＳＫ39・40・41検出
９月17日	ＳＤ49・51検出
10月４日	Ｃ地区バックフォーで表土除去
10月12日	Ｃ地区の地区設定
10月19日	Ｃ地区写真撮影
10月26日	Ｂ・Ｃ地区航空測量
11月１日	Ｂ・Ｃ地区作業終了
12月16日	次年度以降調査部分試掘調査

（服部芳人）

Ⅱ　位置と環境

1　位置と地形

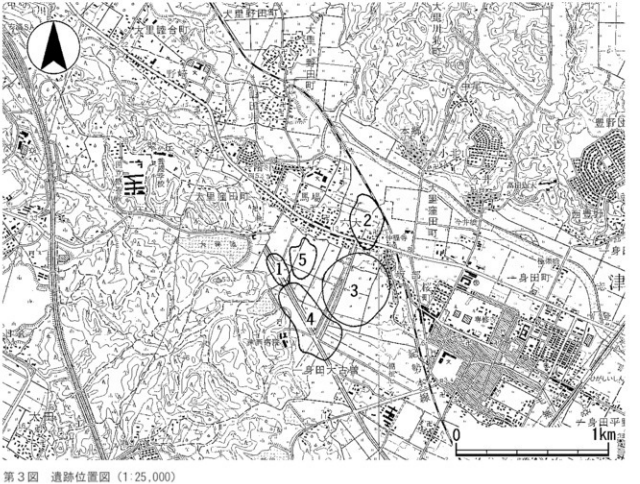
三重県は南北に細長く、その長さは約170kmにも及ぶ。その北西部には伊勢平野が広がり、東に伊勢湾を望む。県庁所在地である津市は、この伊勢平野のほぼ中央に位置し、市内を北から志登茂川・安濃川・岩田川・雲出川などが東流する。志登茂川は、その源を津市芸濃町の丘陵に発し、蛇行しながら南東方向に流れ、高野尾・大里地区の洪積台地を開折する。中流域の大里窪田町付近より川幅を徐々に広げ、沖積平野を形成し、伊勢湾へと流れ込む。この志登茂川の右岸には、標高約30m前後の第三紀層奄芸層群の低丘陵が、安濃町からＪＲ津駅付近まで延び、この低丘陵に付属した洪積台地が沖積平野に舌状に突き出した先端に窪田大垣内遺跡は所在する。標高は約12～15mで、遺跡の南には志登茂川の支流である毛無川が流れる。なお、遺跡の中心は、津市大里窪田町字大垣内であると考えられるが、今回調査した範囲の多くは字池の下地内であり北側にわずかながら字平尾前地内も含まれる。

2　歴史的環境

大垣内遺跡周辺は、近年県営ほ場整備事業、一般国道23号中勢道路建設事業、団体営ほ場整備事業などの開発に伴う発掘調査が数多く行われており、地域の歴史が徐々に明らかにされつつある。こうした発掘調査結果に基づいた大里窪田町周辺の通史的な歴史的環境についてはすでにいくつかの既刊の報告書[6]で述べられているので参照されたい。

今回調査された窪田大垣内遺跡（1）は、奈良時代から平安時代を中心とする遺跡である。大垣内遺跡の所在する大里窪田町一帯は、古代遺跡の密集地帯であり、この時代に限れば、周辺の遺跡として六大A遺跡[7]（2）、六大B遺跡[8]（3）、橋垣内遺跡[9]（4）、安養院跡[10]（5）を挙げることができる。

（服部芳人）



第３図　遺跡位置図（1:25,000）

Ⅲ　層序と遺構

1　A地区

（1）層序（第５図）

南北約100m、東西約20mの南北に長い、ほぼ長方形の調査区で、面積は約2,000㎡である。基本的層序は、上から順に暗灰色土の耕作土（1）、淡黄灰色土の床土（2）、暗灰色砂質土の旧耕作土（3）、暗灰色粘質土の旧耕作土（4）、黒褐色粘土の遺物包含層（7）、明黄色粘土の地山である。遺物包含層は、南にいくほど厚く20～30cm程堆積する。地山は北にいくほど黒色を呈し粘質を帯びており、また北から南にかけて傾斜し、その比高差は約１mである。

（2）遺構

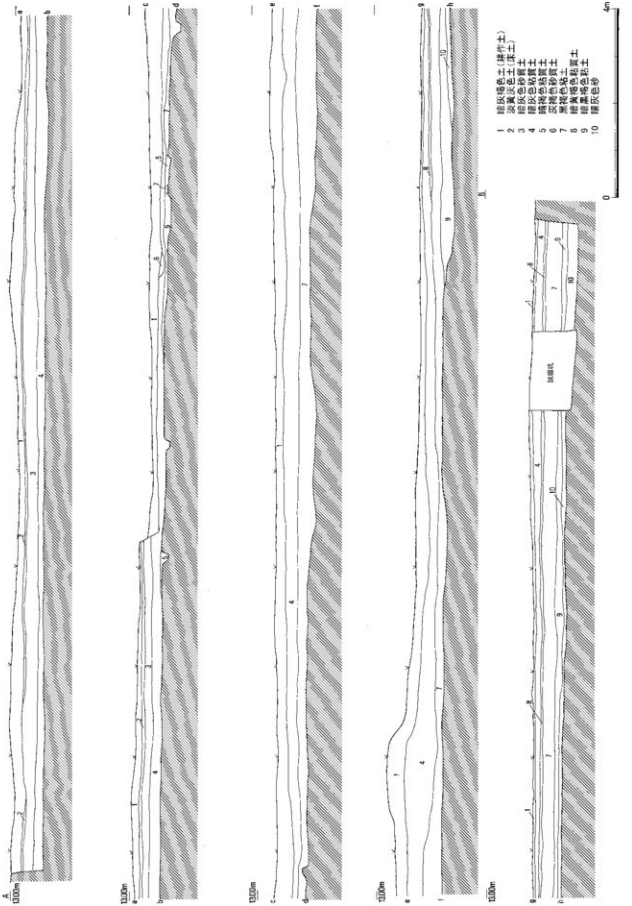
検出した主な遺構は竪穴住居、掘立柱建物、井戸、溝、土坑などで、古墳時代後期から鎌倉時代にかけてのものであるが、中心となる時期は奈良時代から平安時代である。

①古墳時代の遺構

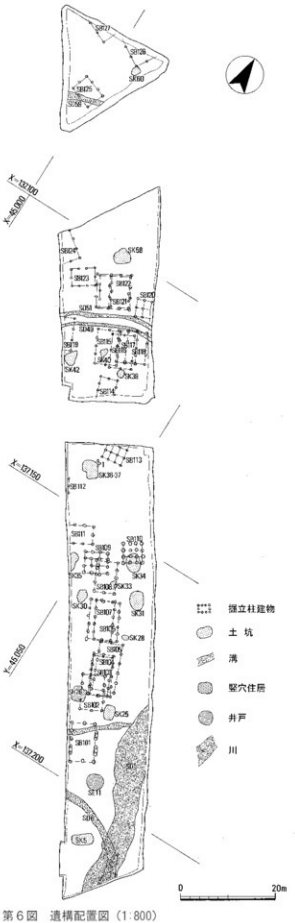
ア　溝

ＳＤ６（第８・９図）　調査区の南寄りで検出した。調査区西壁より弧を描きながら、南壁へ向かって約20m延びる。幅は1.5m～2.5m、深さは1.0m～1.4mと幅のわりには深い溝である。断面は、Ｖ字状に掘り下げ、そののち壁は、ほぼ垂直になる。底部は、平坦である。この溝は、前年度の平成４年度に調査された橋垣内遺跡Ａ地区の旧河道ＳＲ１につながるものと思われる。南側の半分程度は、ＳＤ１と重なるが、切り合い関係によりＳＤ６の方が古い。南壁断面から判断すると、ＳＤ６の上部を削り取り、ほぼ同じ所にＳＤ１が流れたことがうかがわれる。ＳＤ６の最下層は青灰色の砂で、溝が掘られた時期には、ある程度流れがあったものと思われるが、そ

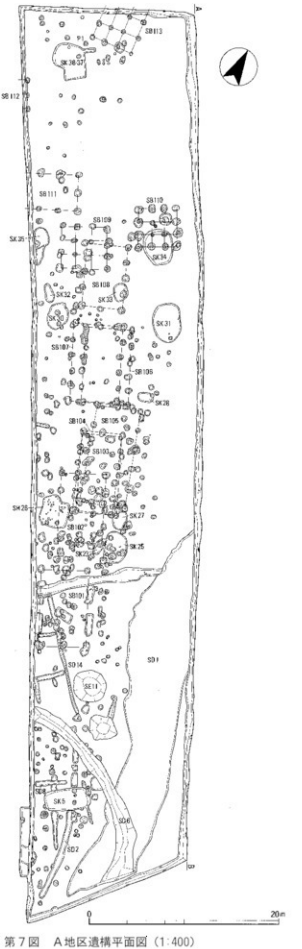
第４図　遺跡地形図（1:5,000）



第５図　Ａ地区土層断面図（1:80）

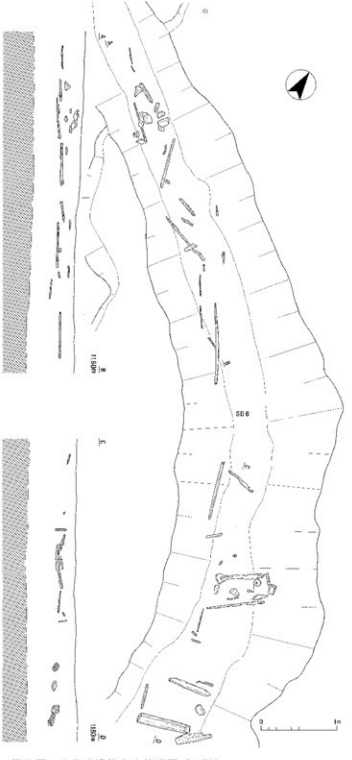


第６図　遺構配置図（1:800）



第７図　Ａ地区遺構平面図（1:400）

のすぐ上層は、暗青灰色もしくは黒灰色の粘土質の埋土である。この層から建築部材をはじめ、枠、棒状木製品などの木製品が多く出土した。また、この層とそれより上層から、土師器椀・甕、須恵器杯・杯蓋・高杯等、６世紀後半から７世紀初頭にかけての遺物が出土した。



第８図　ＳＤ６遺物出土状況図（1:50）

イ　土坑

ＳＫ２５　調査区のほぼ中央で検出した。南北3.2m、東西2.4mで、隅丸の長方形状の土坑である。深さは、検出面から20cmである。出土遺物は土師器甕（190～194）、須恵器杯蓋（196・197）などである。

②奈良～平安時代の遺構

この時期の遺構としては、竪穴住居１棟、掘立柱建物12棟、井戸１基、溝１条、土坑などがある。

ア　竪穴住居

ＳＨ２６（第10図）　調査区の中央西寄りで検出した。平面形は、南北3.2m、東西2.8mのほぼ正方形である。北西側が張り出しているが、他の土坑と重なっている可能性もある。内部に柱穴を４カ所確認したが、南東の柱穴は掘立柱建物ＳＢ102の柱穴と重複する。深さは検出面から10cm程度と浅く、底部は平坦である。周溝、カマドと思われる痕跡は確認できなかった。出土遺物には、土師器杯（166）、土師器甕（168）、底部に墨書がある須恵器杯（169）などがある。

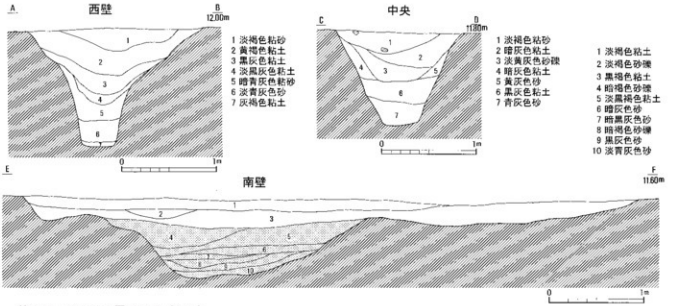
イ　掘立柱建物

掘立柱建物からの出土遺物の多くは細片で、磨滅も著しく時期の決定は難しい。しかし、建物の棟方向、距離間及び柱穴の切り合い関係から大きく４つの時期の変遷が考えられる。

第Ⅰ期

ＳＢ１０２（第11図）　調査区の中央西寄りで検出した。西側柱筋で、竪穴住居ＳＨ26を切る。４間×２間のＮ26°Ｗの南北棟で、桁行7.2m、梁行4.8mである。柱掘形は、隅丸の方形で50cm～60cmとやや大きい。柱間は、桁行が1.8mの等間、梁行は南側で2.4mの等間、北側で2.1m＋2.7mと不揃いである。出土遺物は、土師器細片のみである。

ＳＢ１０８（第12図）　調査区の中央、北寄りで検出した。建物の北西部分を第Ⅲ期のＳＢ109によって切られる。４間×２間のＮ26°Ｗの南北棟で、桁行6.6m、梁行4.2mである。柱掘形は、隅丸の方形で60cm程度と大きく、柱痕跡が確認できたものもある。柱間は、桁行が1.65mの等間、梁行が2.1mの等間で、ＳＢ102と東側柱筋を揃える。出土遺物は、土師器甕、須恵器短頸壺がある。



第９図　ＳＤ６土層断面図（1:40）

第Ⅱ期

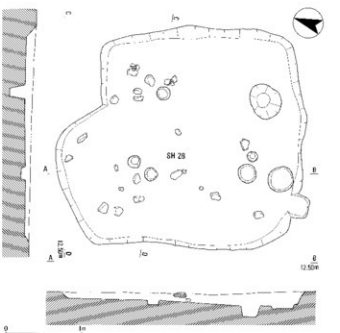
ＳＢ１０４（第11図）　調査区の中央、ＳＢ103とほぼ重なる形で検出した。柱穴の切り合い関係により第Ⅲ期のＳＢ103より古い。４間×２間のＮ27°Ｗの南北棟で、桁行8.25m、梁行4.2mである。柱掘形は、基本的に隅丸の方形であるが、小さめの円形もある。柱間は桁行が北から1.95m＋2.1m＋2.1m＋2.1m、梁行が2.1mの等間である。出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器蓋がある。

ＳＢ１０６（第13図）　調査区の中央、ＳＢ104の北３ｍの位置で検出した。５間×３間のＮ27°Ｗの南北棟で、桁行7.95m、梁行4.8mである。柱間は、桁行が北から1.5m＋1.65m＋1.65m＋1.65m＋1.5m、梁行が西から1.65m＋1.65m＋1.5mである。東側、北側、南側の三方向の柱間が1.5mとなる。なお、ＳＢ104と西側柱筋を揃える。出土遺物は、土師器、須恵器の細片にとどまる。

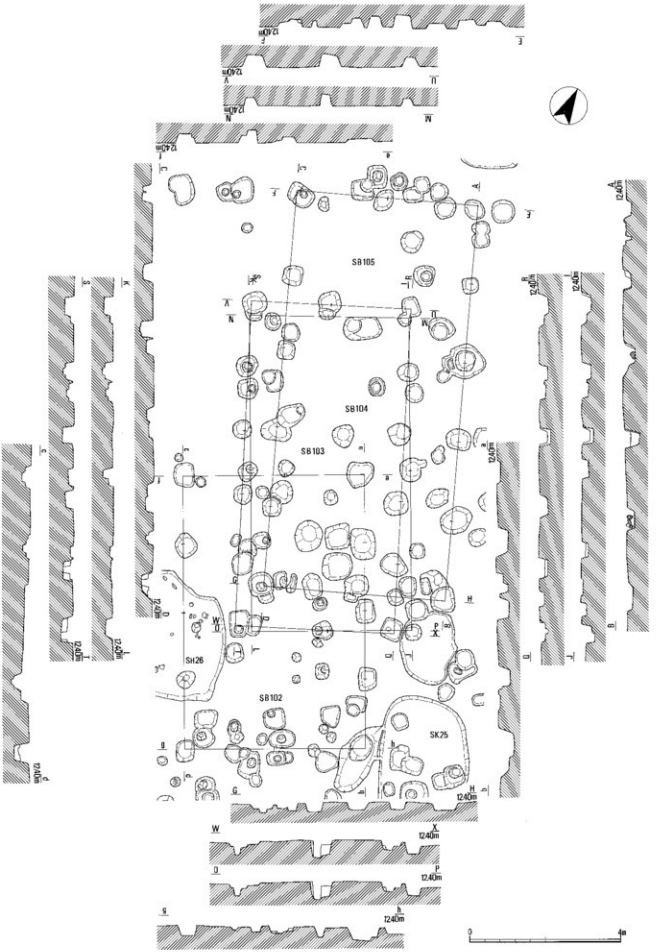
ＳＢ１１０（第14図）　調査区の北東で検出した。３間×３間の総柱建物で、桁行・梁行ともに4.05mで、柱間も1.35mの等間である。他の掘立柱建物と比べて、柱掘形は概ね四角形で大きく、特に側柱は１ｍ近い。倉庫であったと考えられる。柱筋方向はN33°WとＳＢ104・106とやや異なるが、西側柱筋と、ＳＢ106の東側柱筋がほぼ揃うことから同時期のものとして扱う。出土遺物は、土師器甕、須恵器杯・甕がある。

ＳＢ１１１（第14図）　調査区外に伸びるため、規模は確定できないが、３間以上×２間の建物である。桁行方向はＥ28°Ｎで、南側柱筋は、ＳＢ110の北側柱筋と揃う。出土遺物は、土師器甕、須恵器杯蓋がある。

ＳＢ１１２　調査区北寄りの西壁沿いで検出した。西側の大部分が調査区外になるため全体の規模は不明である。柱を２間分確認しただけであるが東西棟と思われる。柱間は、1.5mの等間で、E33°Nである。ＳＢ110と方向が一致するため、この時期にいれた。



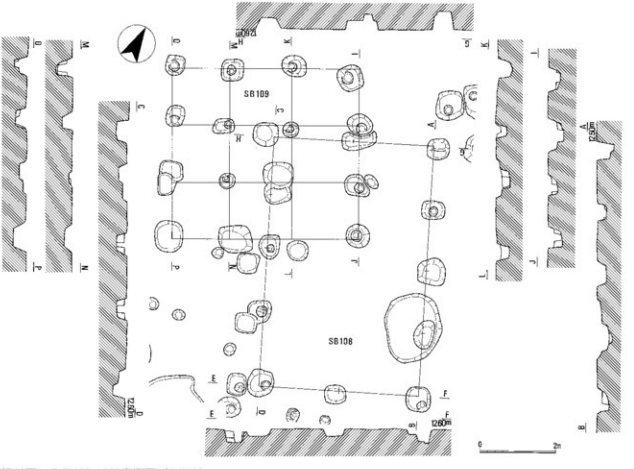
第10図　ＳＨ26遺物出土状況図（1:50）



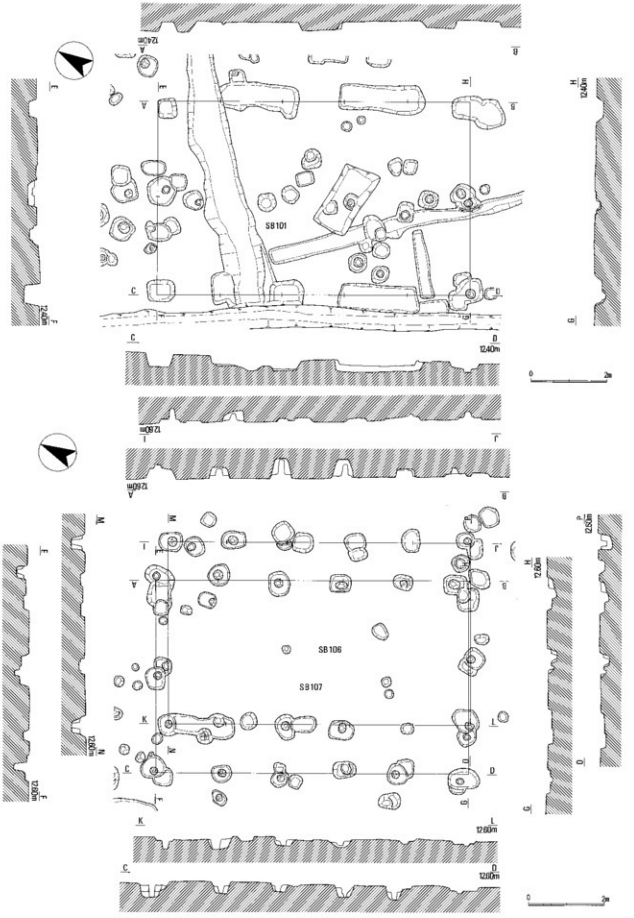
第11図　ＳＢ102～105実測図（1:100）

遺構番号	規模			柱間寸法（m）		棟方向	面積(㎡)	時期	備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)	桁行	梁行				
SB101	5×2	8.25	5.1	1.65等間	2.55等間	N30°W	42.075	第Ⅲ期	溝もち
SB102	4×2	7.2	4.8	1.8等間	2.1+2.7 2.4等間	N26°W	34.56	第Ⅰ期	
SB103	5×2	8.55	4.2	1.8+1.65+1.65+1.65+1.8	2.1等間	N23°W	35.91	第Ⅲ期	
SB104	4×2	8.25	4.2	1.95+2.1+2.1+2.1	2.1等間	N27°W	34.65	第Ⅱ期	
SB105	5×2	10.5	4.8	2.1等間	2.4等間	N22°W	50.4	第Ⅳ期	
SB106	5×3	7.95	4.8	1.5+1.65+1.65+1.65+1.5	1.5+1.65+1.65	N27°W	38.16	第Ⅱ期	
SB107	5×2	8.25	5.1	1.65等間	2.55等間 2.4+2.7	N27°W	42.075	第Ⅲ期	
SB108	4×2	6.6	4.2	1.65等間	2.1等間	N26°W	27.72	第Ⅰ期	
SB109	3×3	4.95	4.5	1.8+1.65+1.5	1.5等間	E30°N	22.275	第Ⅲ期	
SB110	3×3	4.05	4.05	1.35等間	1.35等間	N33°W	16.4025	第Ⅱ期	
SB111	3以上×2	3.9以上	3.9	1.95+1.95+？	1.95等間	E28°N	15.21以上	第Ⅱ期	
SB112	？×2	不明	3.0	不明	1.5等間	E33°N	不明	第Ⅱ期	
SB113	2以上×3	3.3以上	4.5	1.65+1.65+？	1.5等間	N9°W	14.85以上	鎌倉	

第１表　Ａ地区掘立柱建物一覧表



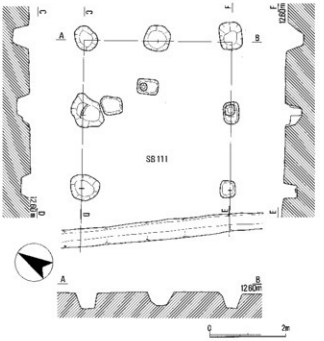
第12図　ＳＢ108・109実測図（1:100）

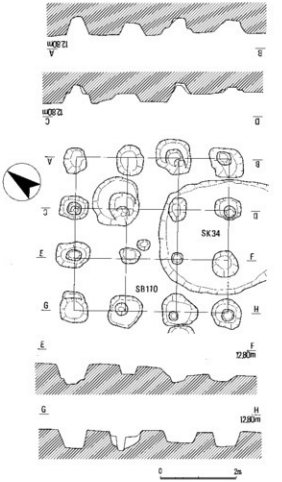


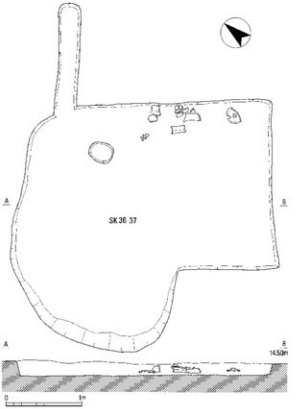
第13図　ＳＢ101・106・107実測図（1:100）

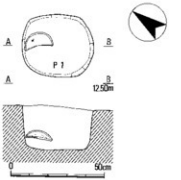
第Ⅲ期

ＳＢ１０１（第13図）　掘立柱建物としては，一番南に位置する。５間×２間のN30°Wの南北棟で，桁行8.25m、梁行5.1mである。桁行に「溝もち」技法を用いる。隣り合う柱間に浅く溝を掘るが，柱掘形そのものは確認できない。横木を添えるために掘ったものであろうか。柱間は桁行が1.65mの等間，梁行が2.55mの等間である。出土遺物は，土師器甕，









第14図　ＳＢ111・110，ＳＫ36・37，Ｅ24pit１実測図（ＳＢ111・110は1:100，ＳＫ36・37は1:50，Ｅ24pit１は1:20）

須恵器杯蓋・甕がある。

ＳＢ１０３（第11図）　調査区の中央、ＳＢ104とほぼ重なる形で検出したが、柱穴の切り合い関係から第Ⅱ期のＳＢ104より新しい。おそらく建て替えであろう。５間×２間のN23°Wの南北棟で、桁行8.55m、梁行4.2mである。柱間は、桁行が北から1.8m＋1.65m＋1.65m＋1.65m＋1.8m、梁行が2.1mの等間である。出土遺物は、土師器甕、須恵器杯蓋・甕がある。

ＳＢ１０７（第13図）　ＳＢ106の西、ほぼ重なる形で検出したが、柱穴の切り合い関係から第Ⅱ期のＳＢ106より新しい。５間×２間のN27°Wの南北棟で、桁行8.25m、梁行5.1mである。建物規模は、ＳＢ101と同一である。出土遺物は、土師器細片にとどまる。

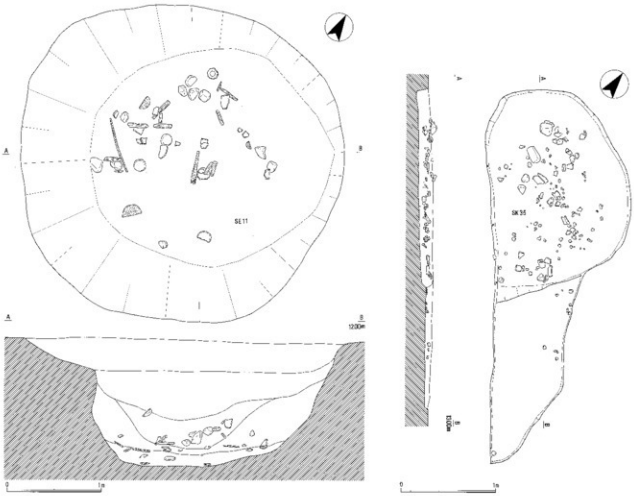
ＳＢ１０９（第12図）　第Ⅰ期のＳＢ108の北西を切る形で検出した。３間×３間の総柱建物である。桁行4.95m、梁行4.5mで、やや東西に長く、柱通りはあまり良くない。柱間は、桁行が東から1.8m＋1.65m＋1.5m、梁行が1.5mの等間である。方向はＥ30°ＮになりＳＢ101と西側柱筋を揃える。出土遺物には、土師器甕片、須恵器杯蓋などがある。

第Ⅳ期

ＳＢ１０５（第11図）　調査区のほぼ中央で検出した。５間×２間のN22°Wの南北棟で、桁行10.5m、梁行4.8mである。柱間は桁行が2.1mの等間、梁行が2.4mの等間である。出土遺物は、土師器細片、須恵器杯蓋がある。建物面積はＡ地区最大である。

ウ　井戸

ＳＥ１１（第15図）　調査区の南寄りで検出した。直径約3.3m、円形掘形の素掘りの井戸である。東側は垂直に掘り、西側は袋状になる。深さは約1.4mである。埋土は、大きく５層に分けられるが、Ⅰ・Ⅱ層にはほとんど遺物は含まれず、Ⅲ層以下に木製品・土器が入り込む。特にⅢ層は、暗青灰色粘質土



第15図　ＳＥ11，ＳＫ35遺物出土状況図（1:40）

で、木質を多く含む。木製品には、曲げ物・櫛（445）などがあり、また「甕」とヘラで線刻された土師器杯（257）や「池」と墨書された土師器杯（259）、「大三」と墨書された灰釉陶器椀（268）なども出土した。その他、土師器甕・皿、黒色土器などもある。時期は、平安時代中期を中心に使用されていたものと思われる。

エ　溝

ＳＤ１　調査区の南寄りで検出した。中央東壁より、やや蛇行しながら南壁へと流れる。幅は５～６ｍ、深さは検出面より30～40cmと浅い。溝というより自然流路的な性格のものであろう。埋土は大きくⅡ層に分けられ、上層（Ⅰ層）は淡褐色粘質土、下層（Ⅱ層）は黒褐色粘質土である。この溝からは、おびただしい量の遺物が出土した。できるかぎり、上層下層の遺物の分別を試みたが、埋土が似かより、また浅い故に厳密に分けることはできなかった。出土遺物には、土師器椀・杯・甕・高杯、須恵器杯蓋・杯・高杯・甕・鉢などをはじめ軒丸瓦、円面硯、土馬といったものもある。古墳時代から奈良時代にかけて流れていたものと思われる。

オ　土坑

ＳＫ３０　調査区中央西寄りで検出した。楕円形状の土坑で、長径2.8ｍ、短径2.0ｍである。深さは検出面より10cmである。出土遺物に、須恵器杯蓋（186）、須恵器杯（187）などがある。

ＳＫ３５（第15図）　調査区北寄りの西壁沿いで検出した。土坑の西側は調査区外になるため、全体の規模は不明である。平面形は、南北2.2ｍ、東西1.5ｍの隅丸の四角形を呈する。深さは検出面より約20cm程度と浅い。埋土は暗褐色粘質土で、炭化物や人頭大よりやや小さめの石も含まれる。出土遺物は細片がほとんどであるが、平安時代の土師器甕、黒色土器がある。

ＳＫ３６・３７（第14図）　調査区の北端で検出した。平面形は、東側と南側は角張り、壁も垂直に落ちる。西側および北側は楕円形状になり、壁もすり鉢状に落ちる。２つの土坑が重なっている可能性が考えられるが、切り合いは確認できない。南北方向に3.3ｍの大きさである。東側の辺に沿うように、遺物の出土があった。土師器蓋（183）・甕（184）・甑片などである。東側および南側の四角張った部分は、竪穴住居であった可能性もある。

カ　ピット

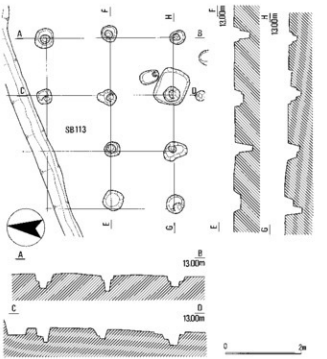
Ｅ２４・Pit１（第14図）　調査区の北端で検出した。径40cm程度の小穴であるが、建物の柱穴にはならない。この小穴の底に近い部分から須恵器杯蓋（189）が出土した。約２分の１の破片であるが、内側に墨書がほどこされている。この墨書と同じ文様の墨書土器はＳＨ26でも出土している。意図的に埋納されたものかもしれない。

③鎌倉時代の遺構

ア　掘立柱建物

ＳＢ１１３（第16図）　調査区の北端で検出した。調査区北壁で規模は確定できないが、２間以上×３間の総柱建物であろう。Ｎ９°Ｗの南北棟であろうか。Ａ地区の他の建物に比べ柱穴が小さく、円形を呈する。出土遺物は、土師器細片にとどまる。

（服部芳人）



第16図　ＳＢ113実測図（1:100）

2　Ｂ地区

（1）層序

Ｂ地区は、Ａ地区から北へ８ｍほど離れたところより調査区が始まる。南北に40ｍ～45ｍ、東西に約20ｍの台形状の調査区で、面積は約850㎡である。基本的層序は、耕作土の下に淡褐色粘質土の遺物包含層が約20cm～30cm程堆積する。その下が、明黄色粘土の地山となる。

（2）遺構

①奈良時代から平安時代の遺構

この時期の遺構としては、掘立柱建物11棟、溝、土坑などがある。

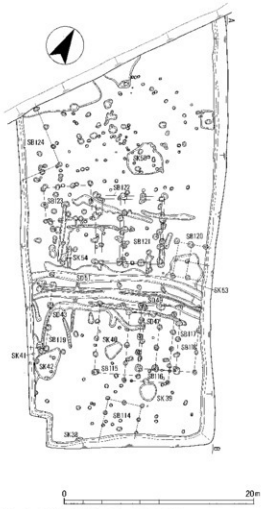
ア　掘立柱建物

掘立柱建物からの出土遺物はＡ地区同様に細片が多く、磨滅も著しいため時期の決定は難しい。しかし、建物の棟方向、距離間及び柱穴の切り合い関係からＡ地区で考えた４つの時期の変遷がおおむね踏襲できそうである。ただし、Ａ地区の掘立柱建物との距離が200ｍ以上離れるものもあり、必ずしも一致するものとは考えていない。

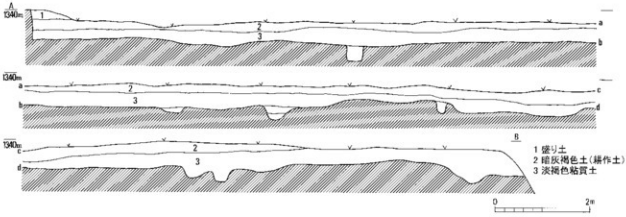
第Ⅰ期

ＳＢ１１５（第19図）　調査区中央南寄りで、４棟の掘立柱建物が集中するが、その中でも最も西側で検出した。４間×２間のN24°Wの南北棟である。桁行7.2ｍ、梁行4.8ｍで、柱間は桁行が1.8ｍ等間、梁行が2.4ｍの等間である。柱掘形は径50cmの円形で、深さは約20cmである。柱穴からの出土遺物は、土師器細片のみである。東側柱筋がＡ地区検出のＳＢ102の西側柱筋と揃い、同じ規模の建物であることから、この時期のものと考えた。

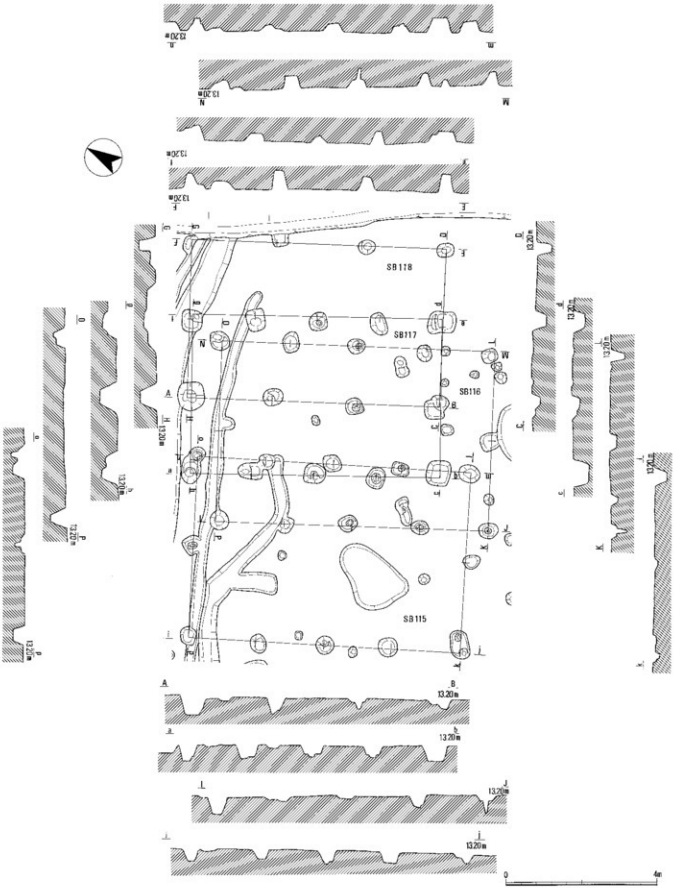
ＳＢ１１９（第20図）　調査区の中央、西壁沿いで検出した。建物が調査区外に延びるため規模は確定できないが、３間×２間以上の南北棟であろう。棟方向は、N24°Wである。桁行6.75ｍ、梁行2.1ｍ以上で、柱間は桁行が2.25ｍ等間、梁行が2.1ｍ



第17図　Ｂ地区遺構平面図（1:400）



第18図　Ｂ地区土層断面図（1:80）



第19図　ＳＢ115～118実測図（1:100）

である。出土遺物は、須恵器杯蓋、土師器細片で時期は明らかではないが、ＳＢ115と棟方向が一致するためこの時期とした。

第Ⅱ期

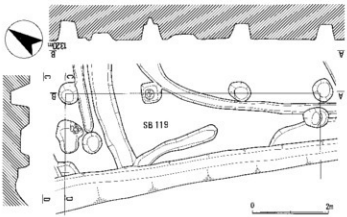
ＳＢ１１６（第19図）　ＳＢ115の東で重なる形で検出した。４間×２間のN26°Wの南北棟である。桁行7.2m、梁行4.8m、柱間は桁行が1.8mの等間、梁行が2.4mの等間である。ＳＢ115と建物規模、柱間寸法が同じである。柱穴の切り合い関係はないが、同時存在は無理であり、似かよった時期に建て替えが行われたものと思われる。出土遺物は、土師器片が少量である。

ＳＢ１１８（第19図）　調査区の東壁際、４棟が集中する最も東で検出した。３間×２間のN26°Wの南北棟である。桁行6.75m、梁行4.2m，柱間は桁行が2.25mの等間、梁行が2.1mの等間である。第Ⅲ期のＳＢ117と重なる柱穴が多いが、切り合い関係からＳＢ118の方が古い。出土遺物は、須恵器杯蓋、土師器片のみであるが、棟方向がＳＢ116と同じであることから、この時期のものとした。

第Ⅲ期

ＳＢ１１７（第19図）　ＳＢ116とＳＢ118との間に位置する。４間×２間のN27°Wの南北棟である。桁行6.6m、梁行4.8mで、柱間は桁行が1.65mの等間、梁行が2.4mの等間である。柱掘形は隅丸の方形で、50cm～60cm程度あり、柱痕跡を確認できたものもある。出土遺物は、須恵器杯蓋、土師器細片のみであるが、柱穴の切り合い関係により第Ⅱ期のＳＢ118より新しく、この時期のものとした。

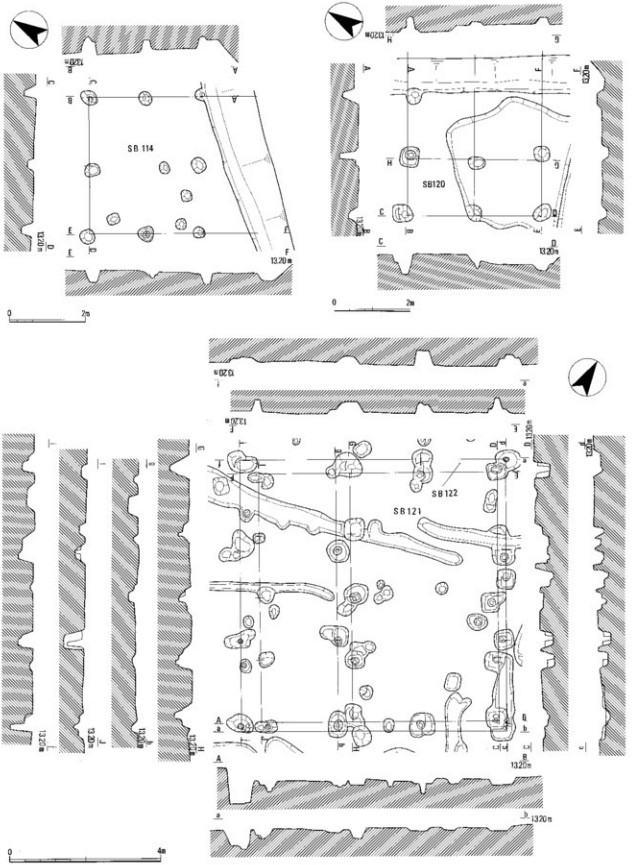
ＳＢ１２１（第21図）　調査区のほぼ中央で検出した。４間×２間の身舎の西側に庇がつく。N29°Wの南北棟で、桁行6.6m、梁行は身舎3.9m＋庇2.4mである。柱間は桁行が1.65mの等間、梁行は身舎が1.95m等間で庇は2.4mである。身舎の柱掘形は隅丸の方形で、庇の柱掘形は径30cmの円形である。柱穴の切り合い関係によりＳＢ122より新しく、建て替えの可能性がある。なお、この建物の柱穴および周辺の包含層より、製塩土器が多く出土しており注目される（第37・44図）。その他の遺物としては、須恵器杯蓋、土師器細片のみである。



第20図　ＳＢ119実測図（1:100）

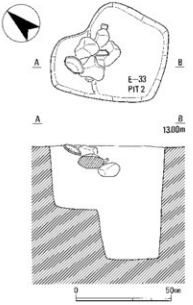
遺構番号	規模			柱間寸法（m）		棟方向	面積(㎡)	時期	備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)	桁行	梁行				
SB114	3以上×2	3.0以上	3.6	1.5+1.5+？	1.8等間	N18°W	10.8以上		
SB115	4×2	7.2	4.8	1.8等間	2.4等間	N24°W	34.56	第Ⅰ期	
SB116	4×2	7.2	4.8	1.8等間	2.4等間	N26°W	34.56	第Ⅱ期	
SB117	4×2	6.6	4.8	1.65等間	2.4等間	N27°W	31.68	第Ⅲ期	
SB118	3×2	6.75	4.2	2.25等間	2.1等間	N26°W	28.35	第Ⅱ期	
SB119	3×2以上	6.75	2.1以上	2.25等間	2.1+？	N24°W	14.175以上	第Ⅰ期	SB115と同じ棟方向
SB120	2以上×2	3.0以上	3.6	1.5+1.5+？	1.8等間	N34°W	10.8以上		総柱？
SB121	4×2+庇	6.6	3.9+2.4	1.65等間	1.95等間+2.4	N29°W	38.69	第Ⅲ期	西面庇
SB122	3×2+庇	7.2	4.5+2.4	2.4等間	2.25等間+2.4	N29°W	49.68	第Ⅲ期	西面庇
SB123	3×2	4.95	3.6	1.65等間	1.8等間	E35°N	17.82	第Ⅳ期	
SB124	3以上×2以上	6.3以上	2.1以上	2.1+2.1+2.1+？	2.1+？	E38°N	13.23以上		

第２表　Ｂ地区掘立柱建物一覧表



第21図　ＳＢ114・120～122実測図（1:100）

ＳＢ１２２（第21図）　ＳＢ121よりひと回り大きく、取り囲む形で検出した。３間×２間の身舎の西側に庇がつく。N29°Wの南北棟である。桁行7.2m、梁行は4.5mの身舎に庇は2.4mである。柱間は桁行が2.4mの等間、梁行は身舎が2.25mの等間で庇は2.4mである。出土遺物には、須恵器杯蓋、土師器細片、製塩土器、黒色土器がある。平安時代前半の建物であろう。このＳＢ122とＳＢ121は似かよった時期に建て替えを行ったと考え、共に第Ⅲ期にいれた。



第22図　ＳＢ122pit実測図（1:20）

第Ⅳ期

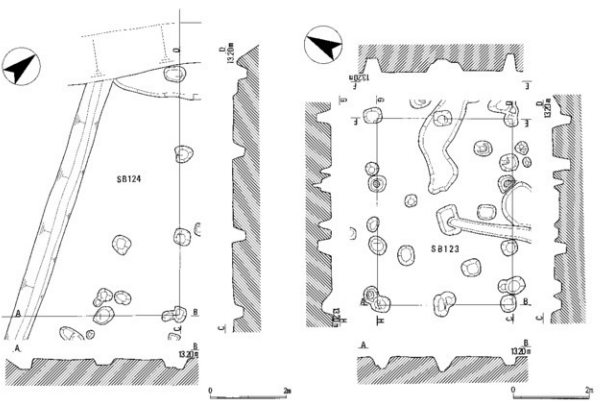
ＳＢ１２３（第23図）　ＳＢ122のすぐ西北で検出した。３間×２間のＥ35°Ｎの東西棟である。桁行4.95m、梁行3.6mで、柱間は、桁行が1.65mの等間、梁行が1.8mの等間である。この建物周辺の遺物包含層でも製塩土器が多く見られた。柱穴からの出土遺物は須恵器片、土師器片、灰釉陶器があり、建物の時期は平安時代中頃と思われる。

その他の時期

第Ⅰ～Ⅳ期の建物とは、棟方向などの共通要素が少なく、また出土遺物から詳細な時期を特定することも難しい掘立柱建物である。

ＳＢ１１４（第21図）　調査区の南端で検出した。建物が調査区外に延びるため規模は確定できないが、３間以上×２間の南北棟であろう。棟方向はN18°Wである。桁行3.0m以上、梁行3.6mで、柱間は桁行が1.5m＋1.5m、梁行が1.8m等間である。

ＳＢ１２０（第21図）　調査区中央東壁沿いで検出した。建物が調査区外に延びるため規模は確でき



第23図　ＳＢ123・124実測図（1:100）

ないが、２間以上×２間の総柱建物であろう。

ＳＢ１２４（第23図）　調査区北西端で検出した。３間以上×２間以上で、Ｅ38°Ｎの東西棟であろう。柱間は、桁行、梁行とも2.1mである。

イ　溝

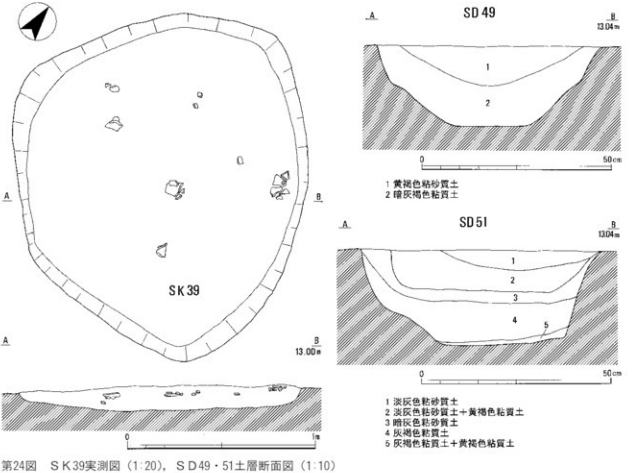
ＳＤ４９　調査区中央で検出した東西方向の溝である。幅は60cm、深さは20cmである。第１層が黄褐色粘砂質土、第2層が暗灰褐色粘質土である。

ＳＤ５１　調査区中央、ＳＤ49のすぐ北側で平行して検出した東西方向の溝である。幅は60cm、深さは25～30cmである。第１層が淡灰色粘砂質土、第２層が淡灰色粘砂質土＋黄褐色粘質土、第３層が暗灰色粘砂質土、第４層が灰褐色粘質土、第５層が灰褐色粘質土＋黄褐色粘質土である。

ウ　土坑

ＳＫ３９（第24図）　調査区の南で検出した。楕円形の土坑で、東西約1.6m，南北1.8mの規模である。深さは、検出面から約20cm程度と浅い。埋土には、炭が少量混じる。出土遺物には、須恵器杯（309）、土師器杯（312）がある。

（服部芳人）



第24図　ＳＫ39実測図（1:20），ＳＤ49・51土層断面図（1:10）

3　C地区

（1）層序

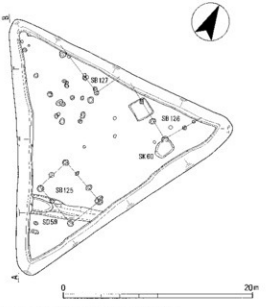
C地区は、B地区から北へ20m程離れたところより調査区が始まる。平面形は一辺25m程のほぼ正三角形の調査区である。基本的層序は、盛土、耕作土の下に黒灰粘質土の遺物包含層が20～50cm程堆積する。その下が暗黄褐色または暗黒灰色粘土の地山となる。

（2）遺構

ア　掘立柱建物

SB125　調査区の最も南側で、溝SD59に切られる位置で検出した。3間×2間のE18°Sの東西棟で桁行5.4m、梁行3.9mである。柱間は桁行が1.8m等間、梁行が1.95m等間である。2つの柱穴はSD59に切られ、その一つが僅かに痕跡を残すにとどまった。柱穴は約80cm、深さは15～30cmとばらつきがある。柱穴からの出土遺物は土師器片のみで少量である。建物の時期はSD59の時期を考えて、奈良時代であろう。

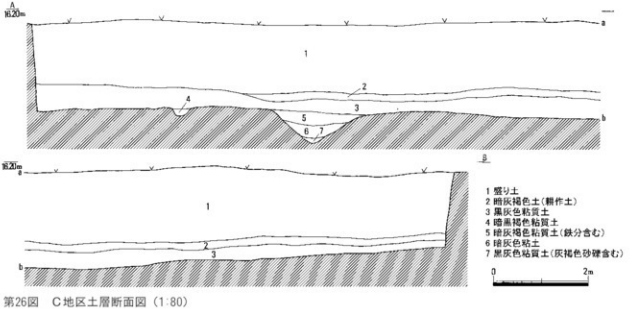
SB126　調査区の北壁沿い、東寄りで検出した。桁行、梁行とも調査区外に延びるため規模は確定できない。調査区の北壁に延びる筋を桁行と仮定すると、2間以上×2間以上のE30°Sの東西棟となる。柱間は桁行が2.4m、梁行が2.4mである。南側柱の西端の柱穴は試掘坑を掘り切った後で検出した。出土遺物は須恵器片、土師器片のみで少量である。



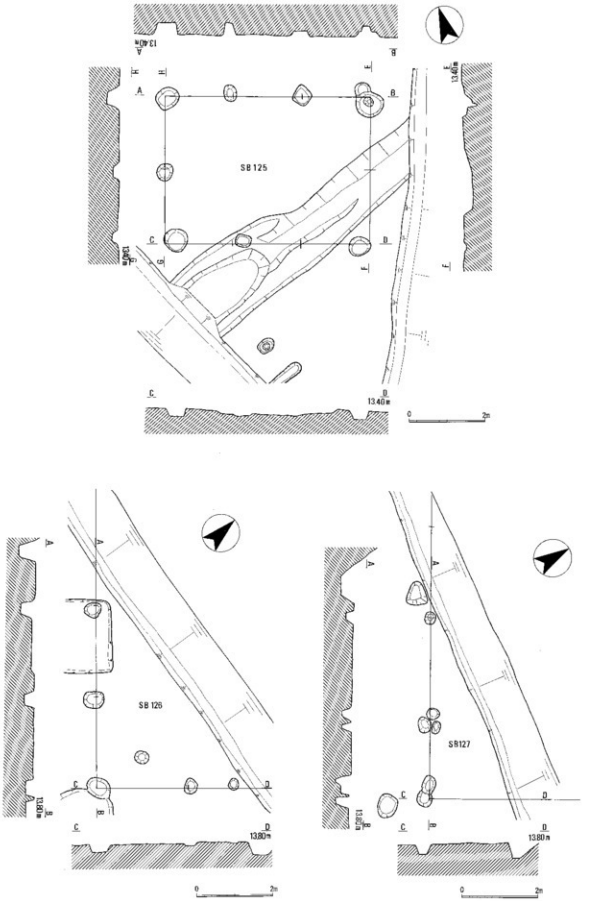
第25図　C地区遺構平面図（1:400）

遺構番号	規模			柱間寸法（m）		棟方向	面積(㎡)	備考
	間数	桁行(m)	梁行(m)	桁行	梁行			
125	3×2	5.4	3.9	1.8等間	1.95等間	E18°S	21.06	
126	2以上×2以上	4.8以上	2.4以上	2.4+2.4+？	2.4+？	E30°S	11.52以上	
127	2以上×？	4.8以上	？	2.4+2.4+？	？	E22°S	？	

第３表　C地区掘立柱建物一覧表



第26図　C地区土層断面図（1:80）



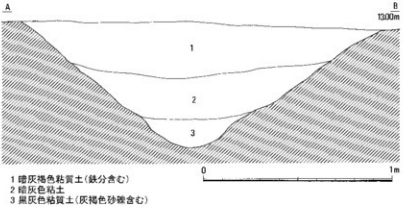
第27図　ＳＢ125～127実測図（1:100）

ＳＢ１２７　調査区の北壁沿いの西寄りで検出した。東西棟と仮定すると桁行２間以上で、方向はＥ22°Ｓとなる。柱間は2.4mである。主な出土遺物は土師器片のみで少量である。

イ　溝

ＳＤ５９　調査区の南側で検出した。幅は２m、深さ70cmで、断面は逆三角形である。埋土は第１層が暗灰褐色粘質土（鉄分含む）、第２層が暗灰色粘土、第３層が黒灰色粘質土（灰褐砂礫含む）である。出土遺物には灰釉陶器皿があり、遺構の時期は平安時代であろう。

（山口順也）



第28図　ＳＤ59土層断面図（1:20）

Ⅳ　遺物

1　A地区の土器・土製品

出土した遺物の多くはA地区からで、整理箱にして約200箱程度である。その中でも、ＳＤ１からの遺物が多い。種類も多く、土師器、須恵器、灰釉陶器、黒色土器、山茶椀などであるが、古墳時代から奈良時代・平安時代の遺物が大半である。遺構別に概略を列挙する。

（1）ＳＤ１出土土器

①土師器ほか（１～38）（第29図）

椀（１～７）　１・２は小型の椀で口径８cm前後、口縁をやや内湾させ端部を尖らせる。３は口径11.2cm、口縁部はやや厚い。５は底部から緩やかに内湾し口縁部に至る。６・７は器高が高くなる深い椀で、底部は厚みがある。

皿（８・９・10）　８・９は底部から内湾気味に立ち上がり端部を内側に丸くやや肥厚させる。10は大型の皿である。

鍋（11・28）　11は口径19cm程で、体部は丸く口縁部は外反する。28は口縁部を大きく外反させ、端部に回線状の窪みを持つ。

ミニチュア土器（12）　口縁部を欠く。底部は平坦で、外面を指おさえで調整する。

甕（13～27）　13～15は、口径14cm前後の小型の甕である。頸部から口縁部は厚みを持ち、内面は縦方向のケズリを行う。16～25・27は口径21cm前後の甕である。頸部から口縁部にかけては、緩やかに外反するもの（18・19）、くの字に折れ曲げるもの（21・22・23）、大きく外反するもの（27）がある。いずれも、外面は縦方向のハケメ調整を行い、頸部から口縁部にかけての内面は横方向のハケメ調整を行う。26は口径26cmの大型の甕で、口縁は大きく外反し、端部を上方に向かい尖らせる。

鉢（29・30）　体部からほとんど湾曲させず口縁に至る。須恵器の模倣か。

土馬（35）　頭から首にかけての破片である。目・鼻・手綱を竹管で付け、耳・たてがみも模倣する。

円面硯（36～38）　36は口径22cmの大型の円面硯で、十文字の透かしを有する。透かしの縦方向は長方形状で、横方向は円形である。37は口径15.2cmで、脚部の透かしは不明である。陸部から海部にかけてなだらかに落ちる。38は口径11cmの小型の円面硯で、長方形の透かしを有する。

②須恵器（39～139）（第30・31図）

杯蓋（39～63）　39～46はかえりがなく天井部から丸みを持って口縁部に続く。口径が12cm前後のもの（39～41）と10cm前後のもの（42～46）がある。天井部が平坦なものは口縁部が内側に丸みを持つ。時期は田辺編年[註10]のＴＫ217古段階併行期のものである。47～49は口縁部内側に小さいかえりを持つ。宝珠のつまみを持つものであろう。50～63は、口縁部内側のかえりはなく、端部は下方へ折れて終わる。つまみを欠くものが多いが、偏平な宝珠のつまみを持つものであろう。口縁部が上方に上がり、端部が下方に折れる形態のもの（62）もある。63には、天井部内面にヘラで「萬」と刻まれている。

壺蓋（64）　平坦な天井部から、直角に口縁部が折れ曲がる形態で、つまみが付くものと思われる。

杯（65～100）　65～69は受け部を持ち、立ち上がりが短く内傾するもので、器高も低い。70～88は受け部の無いものである。底部から内湾気味に口縁部に続くもの（70～72）、底部から外反気味に口縁部に続くもの（79～83）、平坦な底部から直線的に口縁部に至るもの（84～88）がある。89～100は高台が付くものである。高台は底端部に付くものから、底端部より内側に付くものと様々である。88は底部内面に、90は底部外面に、ともにヘラで「大」と刻まれている。

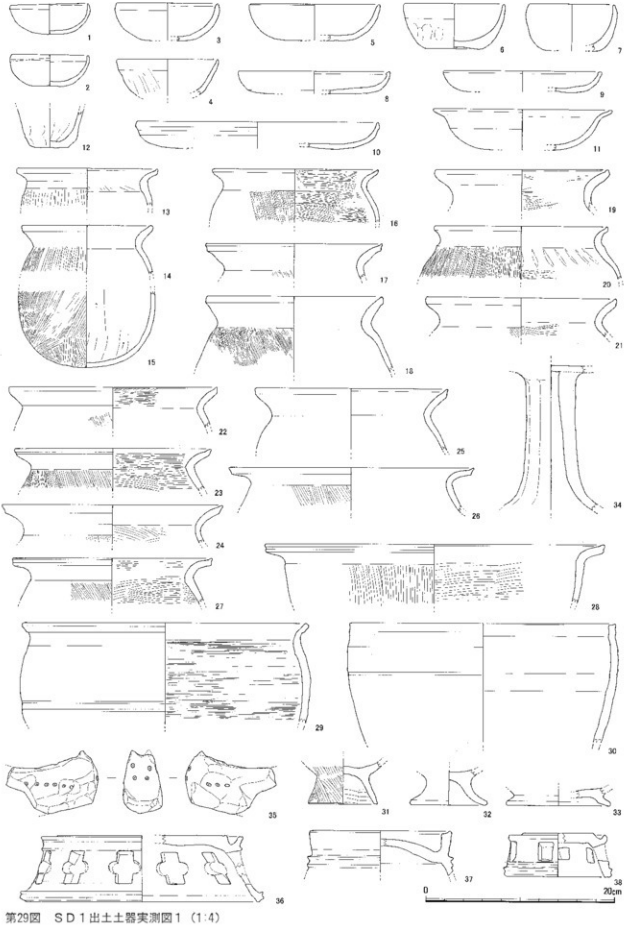
高杯（101～111）　101は有蓋高杯、105は無蓋高杯である。脚部に透かしのあるもの（101）と透かしのないもの（102～111）がある。

壷（112～119・124・125）　112・113は口縁部の破片、114～119は底部の破片である。124・125は胴底部のみ残存する。

甕（120～123）　径８～10cmの球形の体部で、２条の沈線を施す。122は内部に穿孔時の粘土塊が残る。

番号	登録番号	器種	出土位置	法量(cm) 口径	底径	成整手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	004-03	土師器 椀	D4 SD1 第2層	8.3	3.2	外面 ナナニ後ナデ・ナデ 底面 工具ナデ	雲母混合 (0.5mm)	良	灰白 10YR8/2	完存	L字縁部大
2	035-01	土師器 椀	D4 SD1 第2層	8.2 ～ 8.3	3.3	外面 ナデ 底面 敷ノデ	砂粒少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	3/4	外面に粘土接合痕
3	020-06	土師器 椀	C2 SD1 第2・3層	11.0	4.0	外面 ナデ 底面 ナデ	砂粒多く含む (～6mm)	良	灰黄褐 10YR2/6	1/4	内・外面にワラ痕
4	035-02	土師器 椀	D4 SD1 第2層	11.0	—	外面 薄ハリ ノメハケ 底面 ナデ	雲母砂少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/6	
5	035-04	土師器 椀	D4 SD1 第2層	14.0	—	外面 ノナデ 底面 ノデ	砂粒多く含む	良	にぶい橙 7.5YR5/3 にぶい橙 7.5YR7/3	2/5	調整不明瞭 外面薄く剥ぎ
6	043-05	土師器 椀	F5 SD1 第1・2層	11.0	4.7	外面 ナナニ・ナデ 底面 板ナデ	雲母粗含む	良	灰白 10YR8/2	1/4 口縁小片	
7	038-05	土師器 椀	D3 SD1 第2層	11.0	5.0	外面 薄いハケメ 底面 ナデ	雲母粗少し含む	良	灰白 10YR8/2	1/8	
8	015-01	土師器 皿	B11 SD1 第1・2層	16.0	2.4	外面 ケズリ 底面 ナデ	砂粒含む	良	淡橙 5YR8/4 灰白 10YR8/2	1/20	
9	033-05	土師器 皿	C6 SD1 第2層	17.0	2.2	外面 不明 底面 不明	粗砂粒多く含む	良	灰白 7.5YR8/2	8/12	調整不明瞭
10	014-04	土師器 皿	B12 SD1 第1・2層	26.0	3.0	外面 ケズリ 底面 ナデ	粗砂粒含む	良	橙 5YR6/8	1/8	
11	035-05	土師器 鉢	D3 SD1 第1層	19.0	—	外面 ハケ後ナデ 底面 ナデ	雲母粗少し含む	良	にぶい橙 10YR7/2	1/6	調整不明瞭
12	041-04	土師器 ミニチュア	D2 SD1 第1層	—	—	外面 ナナニ・底部ナデ 底面 板ナデ	雲母粗含む	良	淡黄 2.5Y8/3	底部完存	
13	027-03	土師器 甕	C9 SD1 第1層	15.0	—	外面 タテハケ (4本/cm) 底面 ナデ	雲母粗含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/8	
14	034-04	土師器 甕	C6 SD1 第1層	14.0	—	外面 タテハケ (5～6本/cm) 底面 ノデ	雲母粗含む	良	灰白 5YR8/2	1/3	15と同一個体か
15	034-04	土師器 甕	C6 SD1 第1層	14.0	—	外面 タテハケ・ナナメハケ (5～6本/cm) 底面 ケズリ	雲母粗含む	良	灰白 5YR8/2	頸部～半	14と同一個体か
16	029-04	土師器 甕	C8 SD1 第1・2層	17.5		外面 タテハケ (9本/cm) 底面 ココハケ (10本/cm)	雲母粗含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3	1/4	内面に炭化物
17	023-04	土師器 甕	C8 SD1 第1・2層	19.0	—	外面 タテハケ (9～10本/cm) 底面 ヨコナデ	雲母粗含む	良	浅黄橙 10YR8/4	1/8	
18	039-02	土師器 甕	D3 SD1 第1層	19.0	—	外面 タテハケ (10本/cm) 底面 薄いタテハケ (5本/cm)	砂粒少し含む	良	灰褐 7.5YR6/2	1/3	
19	023-06	土師器 甕	C8 SD1 第1・2層	19.0	—	外面 タテハケ 後内面ココハケ (5本/cm) 底面 ケズリ	砂粒少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/4	
20	023-01	土師器 甕	C6 SD1 第1層	18.5		外面 タテハケ (10本/cm) 底面 ナデ・ココハケ (10本/cm)	雲母粗少し含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3 灰白 10YR8/2	1/8	
21	043-06	土師器 甕	B12 SD1 第1・2層	20.5		外面 タテハケ (7本/cm) 底面 ココハケ (5本/cm)	粗砂粒含む	良	浅黄 2.5Y8/3	1/10	
22	021-02	土師器 甕	B12 SD1 第1・2層	22.0	—	外面 タテハケ (8本/cm) 底面 ナデ	砂粒多く含む (～1mm)	やや甘い	にぶい黄橙 7.5Y6/3	1/12	
23	026-05	土師器 甕	C10 SD1 第1・2層	21.0	—	外面 タテハケ (6～7本/cm) 底面 ヨコハケ (5本/cm)	粗砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/4	1/5	
24	034-03	土師器 甕	C5 SD1 第1層	19.0	—	外面 タテハケ (6本/cm) 底面 ヨコハケ (6本/cm)	砂粒多く含む (～2mm)	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/10	
25	021-01	土師器 甕	B12 SD1 第1・2層	20.5		外面 不明 底面 不明	砂粒多く含む (～1mm)	やや甘い	にぶい橙 7.5YR6/3	1/5	乳首の為成整不明
26	014-03	土師器 鍋	B11 SD1 第1・2層	26.0	—	外面 タテハケ (6本/cm) 底面 不明	雲母粗含む	良	淡黄 2.5Y8/3	小片	
27	036-06	土師器 鍋	D3 SD1 第1層	21.5	—	外面 ナナメハケ (6本/cm) 底面 ヨコハケ (5本/cm)	砂粒少し含む	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/8	
28	037-01	土師器 鍋	D4 SD1 第2層	36.0	—	外面 タテハケ (4本/cm) 底面 薄いナナメハケ (4本/cm)	粗砂粒少し含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/12	
29	039-01	土師器 鍋	D4 SD1 第1層	30.5	—	外面 カキメ (10本/cm) 底面 ノキメ (10本/cm)	雲母粗少し含む	良	灰白 2.5Y8/1	1/8	
30	042-02	土師器 鍋	D6 SD1 第1層	28.0		外面 ナデ 底面 ナデ	雲母粗含む	良	淡黄 2.5Y8/3	小片	
31	036-03	土師器 台付甕	D3 SD1 第1層	—	—	脚外面 ナナメハケ (4本/cm) 脚内面 ナデ・ヨコハケ (2本/cm)	雲母粗多く含む	良	灰白 2.5Y7/1	脚部 1/4	
32	031-06	土師器	C7 SD1 第1層	—	—	外面 ナデ 底面 ナデ	砂粒含む (～2.0mm) 長石、石英等	良	橙 5YR7/6 浅黄橙 7.5YR8/6	脚部 1/2	
33	032-08	土師器	C7 SD1 第1層			外面 不明 底面 不明	粗砂粒多く含む	良	灰褐 5YR8/4 灰白 7.5YR8/2	1/6	
34	020-07	土師器 紡錘車	C12 溝	—	—	外面 研磨 底面 ナデ	砂粒含む (～1mm)	良	灰白 2.5Y8/2	脚部	面取り11面
35	007-01	土馬	C8 SD1 第1・2層			手ずくね	粗砂粒含む (～0.5mm)	良	明褐灰 7.5YR7/2 褐灰 7.5YR6/1	頭部のみ	
36	007-02	須恵器 平瓶	C6 SD1 第1層	21.5	7.0	外面 底面	粗砂粒含む	良	灰白 N8/0, 7/0	1/4	
37	028-01	平瓦製	C7 SD1 第1層	15.0		外面 ヒクロナデ 底面 ヒクロナデ・ナデ	雲母粗含む	良	灰白 N8/0, 6/0	小片	焼かし故不明
38	005-02	平瓦製	C5 SD1 第1層	10.5	4.6	外面 ヒクロナデ 底面 ヒクロナデ・ナデ	砂粒含む (1mm)	良	灰白 N4/0	1/3	

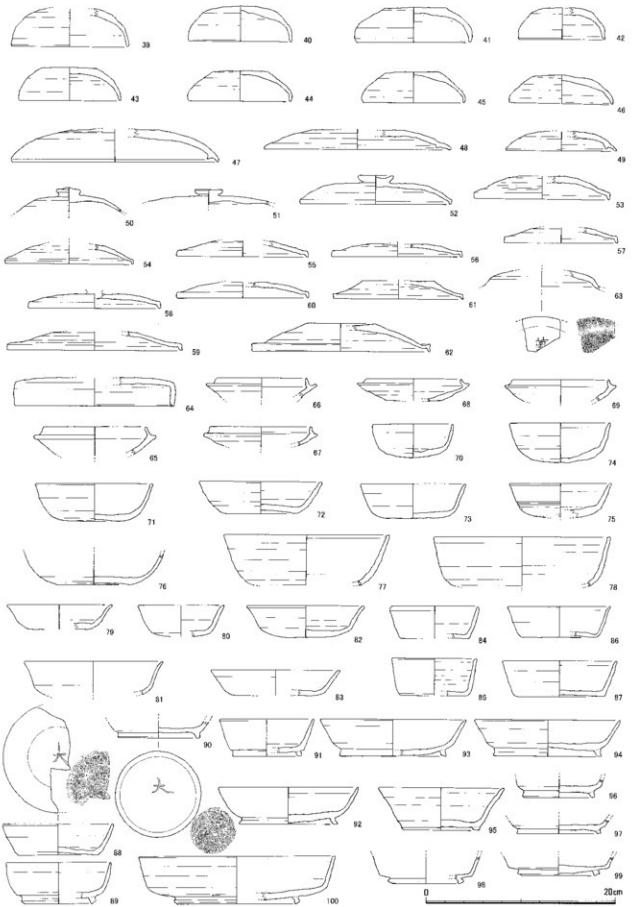
第4表　A地区土器観察表（1）



第29図　ＳＤ１出土土器実測図１（1:4）

番号	遺構名	器種	出土位置	法量 (cm) 上段	法量 (cm) 下段	石材特定の所見	胎土	焼成	色調	残存	備考
39	第2号	石製品	第1トレ SD1	12.5		産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	黒色 2.5N/1	1/4	
40	第3号	石製品	第1トレ SD1	11.0	7.0	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5N/	1/2	
41	第6号	石製品	第1トレ SD1	12.0	7.5	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5N/	1/3	ヘラ状
42	第7号	石製品	第1トレ SD1	9.0	7.5	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	灰 N6/0	1/3	
43	第8号	石製品	第1トレ SD1	11.5	7.5	産地 110 アンピンタクス?	当初の状態	良	灰 5YR/ N6/0	1/2	
44	第9号	石製品	第1トレ SD1	5.5/7.0	5.5/7.0	産地 110 アンピンタクス/ホルンフェルス	当初の状態	良	灰 5YR/ N6/0	完形	
45	第10号	石製品	第1トレ SD1	5.5/6.0	7.5	産地 110 アンピンタクス/ホルンフェルス	当初の状態	良	1.5YR 10YR7/2, 6/1	完形	穿孔痕あり
46	第11号	石製品	第1トレ SD1	5.5/6.0	7.0	産地 110 ホルンフェルス/ホルンフェルス	当初の状態	良	灰 N6/0	1/4	穿孔痕あり
47	第12号	石製品	第1トレ SD1	22.0		産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/12	外側に自然面残存
48	第13号	石製品	第1トレ SD1	18.0		産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/11	
49	第14号	石製品	第1トレ SD1	17.0		産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 5YR/	1/2	
50	第15号	石製品	第1トレ SD1			産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	表面剥 1/1	
51	第16号	石製品	第1トレ SD1	—	—	産地 110 アンピンタクス?	当初の状態	良	N 7.5YR/ N7/0	1/2	外側に自然面残存
52	第17号	石製品	第1トレ SD1	16.0	7.0	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N7/0	1/11	
53	第18号	石製品	第1トレ SD1	17.5	—	産地 110 アンピンタクス	当初の状態	良	赤褐系 10YR7/1	全形	
54	第19号	石製品	第1トレ SD1	1.0	—	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	灰 5YR/	1/8	
55	第20号	石製品	第1トレ SD1	1.0	—	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	灰 N6/0	1/6	
56	第21号	石製品	第1トレ SD1	1.0	—	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	灰 2.5YR/2 N6/0	1/2	
57	第22号	石製品	第1トレ SD1	1.0	—	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/2	
58	第23号	石製品	第1トレ SD1	14.0	—	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/14	
59	第24号	石製品	第1トレ SD1	18.5	—	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	褐 7.5YR/2 10YR6/3	全形	外側に自然面残存
60	第25号	石製品	第1トレ SD1	14.5	—	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	褐 2.5YR/2 N3/0	1/10	
61	第26号	石製品	第1トレ SD1	1.0	—	産地 110 アンピンタクス?	当初の状態	良	灰 2.5YR/ 10YR7/1	全形	
62	第27号	石製品	第1トレ SD1	15.0	2.0	産地 110 アンピンタクス	当初の状態	良	灰 2.5YR/	1/7	
63	第28号	石製品	第1トレ SD1	—	—	産地 110 アンピ	当初の状態	良	灰 5YR/	全形	両面にヘラ状ケズリ
64	第29号	石製品	第1トレ SD1	17.0	—	産地 110 アンピ	当初の状態	良	褐 7.5YR 2.5YR/2 10YR7/1	全形	
65	第30号	石製品	第1トレ SD1	11.0		産地 110 アンピ	当初の状態	良	N 7.5YR/	1/10	
66	第31号	石製品	第1トレ SD1	9.5		産地 110 アンピ	当初の状態	良	N 5YR/ N6/0	1/6	
67	第32号	石製品	第1トレ SD1	11.0		産地 110 アンピ	当初の状態	良	N 7.5YR/	1/5	
68	第33号	石製品	第1トレ SD1	10.0		産地 110 アンピ	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2	1/10	外面にヘラ状
69	第34号	石製品	第1トレ SD1	10.0		産地 110 アンピ	当初の状態	良	N 7.5YR/2 10YR7/1	1/7	
70	第35号	石製品	第1トレ SD1	8.6	3.5	産地 110 アンピ	当初の状態	良	N 5YR/	1/2	
71	第37号	石製品	第1トレ SD1	12.5	4.0	産地 110 アンピ	当初の状態	良	灰 N6/0	1/7	外面にヘラ状ケズリ
72	第38号	石製品	第1トレ SD1	13.0	2.5	産地 110 アンピ/変質ホルンフェルス	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2 10YR7/1	1/2	
73	第39号	石製品	第1トレ SD1	11.0	3.6	産地 110 ホルンフェルス/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/	1/3	外面はやや焼けている
74	第40号	石製品	第1トレ SD1	11.0	4.1	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	灰 N6/0	1/2	
75	第41号	石製品	第1トレ SD1	11.0		産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐 2.5YR/2 N6/0	1/4	外面は焼けて白っぽい色
76	第42号	石製品	第1トレ SD1			産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐 2.5YR/2 N6/0	表面剥離	
77	第43号	石製品	第1トレ SD1	11.0		産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/2	1/6	内面 研磨痕
78	第44号	石製品	第1トレ SD1	15.0	—	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/2	1/10	下辺 研磨痕
79	第47号	石製品	第1トレ SD1	11.5	7.0	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2 10YR7/1	1/17	
80	第48号	石製品	第1トレ SD1	9.5	—	産地 110 アンピ	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2 N6/0	1/5	
81	第49号	石製品	第1トレ SD1	15.0	—	産地 110 アンピ	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/10	
82	第50号	石製品	第1トレ SD1	12.5	3.0	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2	全形	
83	第51号	石製品	第1トレ SD1	16.0	3.7	産地 110 アンピ	当初の状態	良	褐 2.5YR/2 N6/0	1/11	両面にヘラ状
84	第52号	石製品	第1トレ SD1	9.5	3.7	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐 2.5YR/2 N6/0	1/4	
85	第53号	石製品	第1トレ SD1	9.0	4.0	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/6	
86	第54号	石製品	第1トレ SD1	11.0	3.0	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/3	
87	第56号	石製品	第1トレ SD1	17.5	3.7	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 5YR/	1/4	
88	第57号	石製品	第1トレ SD1	11.5	3.5	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N7/0	1/3	両面 ヘラ状ケズリ、研磨 痕あり
89	第58号	石製品	第1トレ SD1	11.5	3.7	産地 110 アンピ	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2	1/4	
90	第59号	石製品	第1トレ SD1	—	—	産地 110 アンピ	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2	表面剥離	
91	第60号	石製品	第1トレ SD1	10.0	2.0	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/2	
92	第61号	石製品	第1トレ SD1	11.5	3.0	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2	1/4	半割?
93	第62号	石製品	第1トレ SD1	11.5	3.0	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/2	1/5	
94	第63号	石製品	第1トレ SD1	11.5	4.5	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/2	1/6	両面 1/2
95	第64号	石製品	第1トレ SD1			産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2 N6/0	両面 1/2	
96	第65号	石製品	第1トレ SD1	—	—	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐 2.5YR/2 N6/0	両面 1/2	
97	第66号	石製品	第1トレ SD1	—	—	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2	両面 1/2	
98	第67号	石製品	第1トレ SD1	—	—	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	両面 1/2	
99	第68号	石製品	第1トレ SD1	—	—	産地 110 アンピ/ホルンフェルス	当初の状態	良	褐系 2.5YR/2	両面 1/2	
100	第69号	石製品	第1トレ SD1	20.0	2.0	産地 110 ホルンフェルス	当初の状態	良	N 7.5YR/ N6/0	1/2	

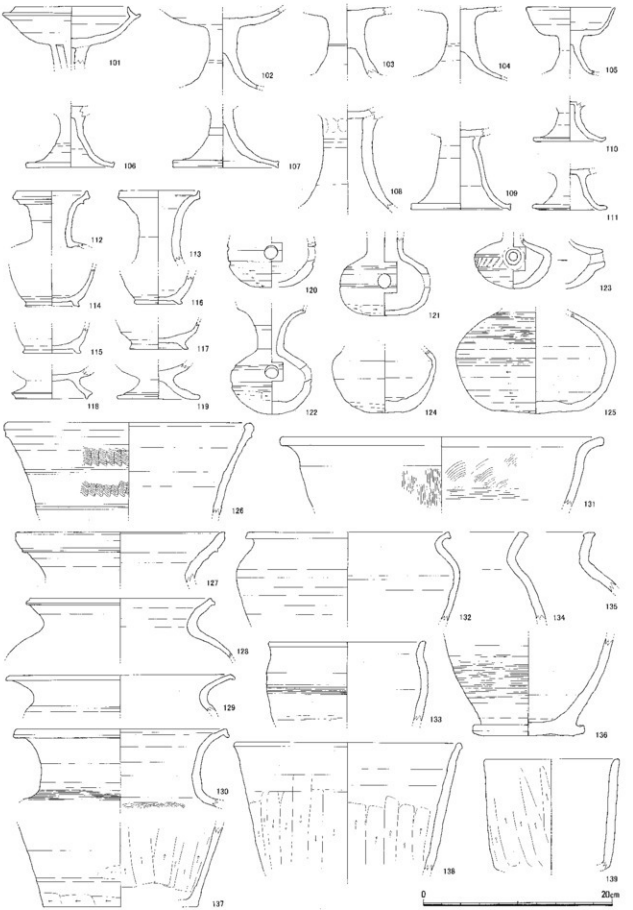
第５表　Ａ地区土器観察表（2）



第30図　ＳＤ１出土土器実測図２（1:4）

番号	遺物番号	器種	出土位置	法量(cm) 口径	底径		調査技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
101	020-01	須恵器 有蓋 高杯	C 2 SD 1 第2・3層	12.2		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ケズリ	砂粒含む (～5mm)	良	灰 N6/0	杯部 1/2	3方透かし
102	036-05	須恵器 高杯	C 6 SD 1 第1層	–		–	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	緻砂含む	良	灰 N7/0	脚部	脚部に沈線1条
103	01/ 03	須恵器 高杯	B 8 SD 1 第1・2層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロ ノデ	微砂含む	良	灰 N6/0	脚部	脚部に沈線1条
104	079-03	須恵器 高杯	C 8 SD 1 第1・2層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む	甘い	灰白 7.5Y8/1	脚部	脚部に沈線1条
105	027-07	須恵器 高杯	C 10 SD 1 第1・2層	9.5		–	外面 ロクロナデ・ケズリ? 内面 ロクロナデ	細砂含む	良	灰 N6/0	脚部	脚部に沈線1条
106	030-03	須恵器 高杯	C 8 SD 1 第1・2層				外面 ロクロ ノデ 内面 ロクロ ノデ	微砂含む	良	灰 N5/0	脚部 1/4	脚部に沈線1条
107	043-07	須恵器 高杯	C 2	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂含む	良	灰 N4/0, 5/0, 6/0	脚部 3/8	脚部に沈線2条
108	018-02	須恵器 高杯	B 8 SD 1 第1・2層	–		–	外面 ノデ・オサエ 内面 ナデ	微砂含む	良	灰白 10Y8/1 褐灰 7.5YR5/1	脚部	二条、波状文
109	018-03	須恵器 高杯	B 9 SD 1 第1・2層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	微砂含む	良	灰 N5/0	脚部 1/12	
110	024-05	須恵器 高杯	C 8 SD 1 第1・2層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂含む 少しさむ	良	灰 N6/0	脚部 1/2	
111	033-07	須恵器 高杯	C 5 SD 1 第1層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロ ノデ・ノデ	砂粒含む (～1mm)	良	灰 N5/0	脚部 1/3	
112	038-03	須恵器 壺	D 2 SD 1 第3層	7.6		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	細砂含む	良	褐灰 10YR6/1 オリーブ灰 10Y4/2	頸部のみ	肩部に2条の沈線
113	030-05	須恵器 壺	C 7 SD 1 第1層	8.5		–	外面 ロクロ ノデ 内面 ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 N6/0	口縁から 頸部のみ	
114	035-03	須恵器 壺	D 4 SD 1 第2層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂含む 多くさむ	良	内：にぶい赤褐 7.5Y4/3 外：灰 N6/0	底部 1/2	
115	031-02	須恵器 壺	C 7 SD 1 第1層	–		–	外面 ロクロナデ・ヘラケズリ・糸切り 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む (～1mm)	良	内：白 N7/0 外：灰 N6/0	底部 2/5	
116	026-01	須恵器 壺	C 7 SD 1 第2層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロ ノデ	微砂含む	良	灰 N4/0	底部完存	
117	038-07	須恵器 壺	D 4 SD 1 第2層	–		–	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒 多くさむ	良	内：黄灰 10YR6/1 外：黒褐 10YR3/1	底部のみ	
118	032-04	須恵器 壺	C 5 SD 1 第2層	–		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ・ナデ	微砂含む 解砂含む	良	褐灰 10YR6/1	頸部のみ ほぼ完形	
119	020-02	須恵器 壺	C 2 SD 1 第2・3層				外面 ロクロナデ 内面 ナデ	砂粒含む (～2mm)	良	黒褐灰 7.5YR7/1	頸部 3/5	
120	036-04	須恵器 鉢	D 4 SD 1 第2層	–		–	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	粗砂含む 多くさむ	良	灰 N6/0	体部のみ	単孔1個、上下に沈線各1条 自然釉付着
121	033-06	須恵器 鉢	C 5 SD 1 第1層	–		–	外面 ロクロナデ・手持ちケズリ・オサエ 内面 ロクロ ノデ	砂粒含む (～2mm)	良	灰 5Y6/1	体部のみ	単孔1個、上下に沈線各1条 自然釉付着
122	004-04	須恵器 鉢	D 2 SD 1 第3層	–		–	外面 ロクロ ノデ・ケズリ・ノデ 内面 ロクロナデ・ナデ	微砂含む (～1mm)	良	灰 5Y6/1	体部完存	単孔1個、上下に沈線各1条 内面に単孔で取れた馬具が残る
123	005-01	須恵器 鉢	D 7 SD 1 第3層	–		–	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	微砂含む (～1mm)	良	灰 5Y6/1	体部完存	単孔1個、上下に沈線各1条 沈線更に刺突文
124	036-02	須恵器 鉢	D 4 SD 1 第2層				外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロ ノデ	粗砂含む 多くさむ	良	灰 N6/0	体部下半	
125	034-01	須恵器 壺	C 5 SD 1 第1層	–		–	外面 カキメ（/本/cm）・ロクロケズリ・オサエ 内面 ロクロナデ・ナデ	砂粒含む (～3mm)	良	灰 5Y6/1	体部 1/3	内部に馬土つなぎ目残り
126	028-03	須恵器 壺	C 8 SD 1 第1・2層	26.5		–	外面 ロクロナデ・擬文(ヘラ・櫛) 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～3mm)	良	緑オリーブ灰 2.5GY3/1	口縁部 1/6	沈線+波状文
127	013-01	須恵器 壺	B 11 SD 1 第1・2層	22.2		–	外面 ロクロナデ 内面 ロクロ ノデ	細砂含む	良	灰 N6/0	口縁部 1/2	
128	030-01	須恵器 壺	C 8 SD 1 第1・2層	20.0		–	外面 ロクロナデ・タタキ後ナデ 内面 ロクロナデ	微砂含む	良	灰 5Y6/1	口縁部～ 胴部1/8	
129	026-04	須恵器 壺	C 10 SD 1 第1・2層	23.5		–	外面 ノキメ（5本/cm） 内面 ロクロナデ	細砂含む	良	灰 5Y5/1	口縁部 1/16	
130	017-02	須恵器 壺	B 10 SD 1 第1・2層	27.5		–	外面 カキメ（9～10本/cm） 内面 タタキ（8mm間隔）	微砂含む	良	灰白 N7/0 灰 N5/0	口縁部 1/8	
131	021-05	須恵器 甕か	B 12 SD 1 第1・2層	34.5		–	外面 コマナデ・タテハケ（8本/cm） 内面 ナナメハケ（6本/cm）・ナデ	砂粒含む (～4mm)	甘い	灰白 5Y8/1	口縁部 1/10	三沈けか？
132	030-02	須恵器 鉢	C 8 SD 1 第1・2層	21.0		–	外面 ロクロナデ・ケズリ 内面 ロクロ ノデ	粗砂含む	良	灰 N6/0	1/8	
133	024-02	須恵器 鉢	C 9 SD 1 第1・2層	17.0		–	外面 ロクロナデ・カキメ 内面 ロクロナデ	微砂含む 多くさむ	良	褐灰 10YR5/1	1/6	外面に沈線1条
134	031-03	須恵器 鉢	C 7 SD 1 第1層	–		–	外面 ロクロ ノデ・タテ ノデ タタキ 内面 ロクロナデ・コマナデ	微砂や 多くさむ	良	灰白 5YR/1～8/2	小片	135と同一個体か
135	028-02	須恵器 鉢	C 8 SD 1				外面 ロクロナデ・タテ方向タタキ 内面 ロクロナデ	微砂含む 多くさむ	良	灰白 2.5Y8/1	小片	134と同一個体か
136	020-03	須恵器 鉢	C 9 SD 1 第1・2層	–		–	外面 カキメ（6本/cm）・ナデ・ヘラ ガリ後ナデ 内面 ロクロナデ	砂粒 多くさむ (～4mm)	良	褐灰 10YR6/1	底部 1/2	底部に刺突文
137	013-03	須恵器 鉢	B 11 SD 1 第1・2層	–		–	外面 ロクロナデ・ケズリ 内面 ケズリ	砂粒含む	良	灰 N6/0	1/4	
138	042-01	須恵器 鉢	D 2 SD 1 第1層	24.0		–	外面 ナデ・ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ	砂粒含む	良	内：灰白 5Y6/1 外：灰白 2.5Y8/2	1/4	
139	030-04	須恵器 鉢	C 7 SD 1 第1層	14.5		–	外面 タテ方向ケズリ後ナデ 内面 ナデ	砂粒含む	良	内：灰白 N8/0 外：灰白 N4/0	1/6	

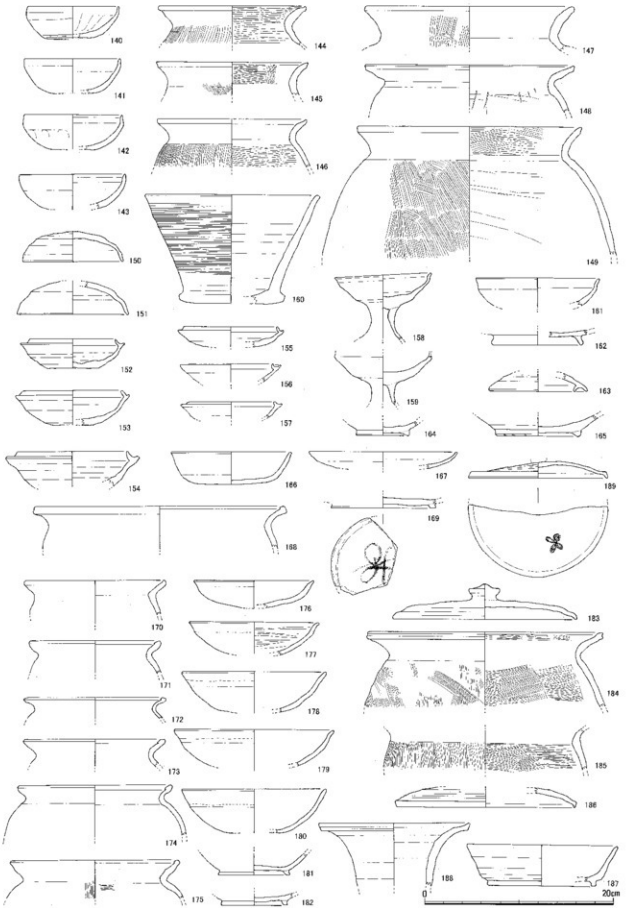
第6表　A地区土器観察表（3）



第31図　ＳＤ１出土土器実測図３（1:4）

番号	登録番号	器種	出土位置	法量 (cm) 口径	器高	出土層位の所属	土器型式の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
140	05-03	土師器 埦	3-4 SD6	10.0	3.5	外面 Pit11	イブシ・ナデ ヨコナデ	微砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR6/4	1/2	大型 見返りタイプ 外面朱上塗SB4
141	05-04	土師器 埦	5-4 SD6	10.0	3.5	外面 Pit11	ナデ ナデ	砂粒含む	良	橙 7.5YR7/6	3/8	
142	05-07	土師器 皿	5-4 SD6	10.5	3.7	外面 Pit11	ヨコナデ ナデ	砂粒含む	良	橙 5YR7/6	1/3	
143	05-05	土師器 埦	5-4 SD6	11.0	—	外面 Pit11	イブシ ナデ	微砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/4	1/4	
144	05-07	土師器 埦	5-4 SD6	15.5	—	外面 Pit11	タテハケ (4～5本/cm) ヨコハケ (4～5本/cm)	微砂粒少し含む	良	灰白 10YR8/2	1/4	
145	049-06	土師器 皿	3-4 SD6	16.0	—	外面 Pit11	タテハケ (3本/cm) ヨコハケ (3本/cm)	砂粒含む	良	浅黄橙 7.5YR8/4	1/8	外面朱塗
146	052-02	土師器 皿	5-4 SD6	16.0	—	外面 Pit11	タテハケ (5～6本/cm) ヨコハケ (5本/cm)	微砂粒少し含む	良	浅黄橙 5YR8/4	1/5	大型 薄作者
147	049-08	土師器 皿	5-4 SD6	22.0	—	外面 Pit11	ハケ (5本/cm) ヨコナデ	砂粒含む (～3mm)	良	灰白 10YR8/2	小片	外面 見返りタイプ
148	049-07	須恵器 杯	5-5 SD6	22.0	—	外面 Pit11	不明 ケズリ	細砂粒含む	良	褐灰 10YR6/1	1/5	大型二点重
149	050-0	土師器 皿	5-4 SD6	21.5	—	外面 Pit11	ノブシハケ (5本/cm) 粗ナデ ハケメ ナデ	微砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/3	1/8	
150	05-07	須恵器 杯蓋	5-4 SD6	10.5	3.7	外面 Pit11	ヘラケズリ ヘラケズリ ナデ	砂粒含む	良	灰 N4/0	1/2	
151	049-0	須恵器 杯蓋	5-5 SD6	12.0	—	外面 Pit11	ヘラケズリ ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ ナデ	砂粒多く含む	良	灰白 N7/0	1/4	
152	05-06	須恵器 杯	5-4 SD6	9.0	3.3	外面 Pit11 内面	ヘラケズリ・ナデ ヘラケズリ ヨコナデ ヨコナデ	砂粒多く含む	良	内：灰 N6/0 外：暗緑灰 10GY6/1	1/3	外面窯詰SB4 内面重ね
153	049-04	須恵器 杯	5-5 SD6	10.5	3.5	外面 Pit11	ヘラケズリ ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ	砂粒含む (～2mm)	甘い	灰白 5Y8/1	1/3	外面墨跡あり
154	049-03	須恵器 杯	5-5 SD6	14.0	3.5	外面 Pit11	ヘラケズリ ヘラケズリ ヨコナデ	砂粒含む	良	灰 5Y6/1	1/6	
155	049-05	須恵器 杯	5-5 SD6	10.0	2.9	外面 Pit11	ヘラケズリ ヨコナデ ナデ	微砂粒少し含む	良	灰 N6/0	1/8	
156	05-10	須恵器 杯	5-4 SD6	9.0	—	外面 Pit11	ヘラケズリ ヨコナデ ナデ	微砂粒少し含む	良	灰 N7/0	1/6	
157	05-07	須恵器 杯	5-5 SD6	9.0	—	外面 Pit11	ヘラケズリ ヨコナデ ナデ	砂粒少し含む	甘い	灰白 7.5Y8/1	1/6	焼成悪い
158	049-03	須恵器 皿?	5-5 SD6	10.0	—	外面 Pit11	ナデ ナデ	砂粒含む (～2mm)	甘い	灰白 N7/0	1/3	杯部と脚部の間外面に粘土接合痕
159	05-08	須恵器 高杯	5-5 SD6	—	—	外面 Pit11	ヘラケズリ ヨコナデ ヨコナデ	微砂粒多く含む	甘い	内：灰白 7.5Y7/1 外：灰 7.5Y6/1	杯部 1/3 脚部 1/3	杯部と脚部の間外面に粘土接合痕
160	050-02	須恵器 皿	5-4 SD6	18.0	12.5	外面 Pit11 内面	ヘラケズリ後カキメ (9本/cm) ヨコナデ ヨコナデ ナデ	砂粒含む (～5mm)	良	灰 N6/0	1/3	1 線引記号有り
161	053-07	須恵器 皿?	5-3 SD2	13.0	—	外面 Pit11 内面	ヘラケズリ ヨコナデ ヘラケズリ ナデ	微砂粒少し含む	良	灰 N6/0	1/6	
162	053-0	須恵器 皿?	5-3 SD2	—	—	外面 Pit11 内面	ヨコナデ ヨコナデ ヘラケズリ ナデ	砂粒 (砂粒はとんどありません)	良	灰白 2.5Y7/1	底部 1/3	
163	053-07	須恵器 壺	5-4 SD8	7.5	—	外面 Pit11	ヨコナデ・コゲロケズリ ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 N7/0	1/2	
164	053-03	山茶碗 小椀	5-2 SD14	—	—	外面 Pit11	ヘラケズリ・糸切り痕 ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 2.5Y7/1	底部 1/3	大型に分類
165	053-06	山茶碗	5-5 SD14	—	—	外面 Pit11	ヘラケズリ・糸切り痕 ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 5Y8/1	底部 1/2	大型に分類 スサモミガラ痕
166	054-0	土師器 杯	5-11 S 126	12.8	3.5	外面 Pit11	ヨコナデ・ノブシ ヨコナデ・ナデ	微砂粒少し含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3	2/3	鹿角鉄鋏痕
167	058-02	土師器 皿	5-12 S 476	15.5	—	外面 Pit11	ヨコナデ ヨコナデ・ナデ	微砂粒 (～2mm)	良	橙 5YR6/6	1/6	
168	058-04	土師器 皿	5-11 S 426	16.0	—	外面 Pit11	ナデ ナデ	微砂粒含む	良	橙 7.5YR7/6	小片	入念ロ不揃い
169	053-08	須恵器 杯	5-11 S 126	—	—	外面 Pit11	ヨコナデ・刷毛目ケズリ ヨコナデ	微砂粒多く含む	良	浅黄 2.5Y8/3	1/4	大型底部に平高
170	060-0	土師器 皿	5-19 S K35	15.0	—	外面 Pit11	ハケメ ナデ	微砂粒含む	良	灰白 10YR8/2	1/8	器面荒れ著しい
171	053-05	土師器 皿	5-19 S K35	14.0	—	外面 Pit11	ナデ ナデ	砂粒 (砂粒はとんどありません)	良	灰白 2.5Y8/2	1/8	器面摩滅著しい
172	059-07	土師器 皿	5-19 S K35	15.0	—	外面 Pit11	不明 ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙 7.5YR8/3	口縁 1/3	器面摩滅著しい
173	059-03	土師器 皿	5-19 S K35	15.0	—	外面 Pit11	不明 ナデ	微砂粒含む	良	浅白橙 10YR8/3	1/8	器面摩滅著しい
174	054-07	土師器 皿	5-19 S K35	16.0	—	外面 Pit11	ハケメ ナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 10YR8/2	口縁 1/4	器面荒れ著しい
175	059-02	土師器 皿	5-19 S K35	18.0	—	外面 Pit11	タテハケ (7本/cm) ヨコハケ (7本/cm)	微砂粒少し含む	良	灰白 10YR8/2	口縁 1/8	鹿角鉄鋏痕
176	053-08	土師器 皿	5-19 S K35	12.5	—	外面 Pit11	オフキ タテハケ (5本/cm) 後ナデ	微砂粒少し含む	良	浅黄 5Y8/4	1/6	器面摩滅著しい
177	059-05	黒色土器 杯	5-19 S K35	13.5	—	外面 Pit11 内面	ナデ・オレ ミガキ 細いヘラミガキ	微砂粒少し含む	良	内：黒 10YR2/1 外：灰白 10YR8/2	1/7	器面荒れ著しい
178	054-05	黒色土器 杯	5-19 S K35	15.0	—	外面 Pit11	オフキ ミガキ	砂粒 (砂粒はとんどありません)	良	内：黒褐 10YR3/1 外：灰白 10YR8/2	1/5	鹿角鉄鋏痕
179	055-03	黒色土器 杯	5-19 S K35	16.5	—	外面 Pit11	オフキ ミガキ	砂粒 (砂粒はとんどありません)	良	内：黒褐 10YR3/1 外：灰白 10YR8/2	1/5	器面摩滅著しい
180	054-04	黒色土器 杯	5-19 S K35	15.0	—	外面 Pit11	オフキ ミガキ	砂粒 (砂粒はとんどありません)	良	内：黒 5Y2/1 外：灰白 2.5Y8/2	1/6	器面摩滅著しい
181	059-04	黒色土器 皿	5-19 S K35	—	—	外面 Pit11	ナデ ナデ	微砂粒少し含む	良	内：灰白 N8/0 外：灰白 7.5Y8/1	口縁 1/4	鹿角鉄鋏痕
182	053-04	黒色土器 皿	5-19 S K35	—	—	外面 Pit11	ナデ ナデ	砂粒 (砂粒はとんどありません)	良	内：黒 10YR2/1 外：浅黄橙 7.5YR8/3	口縁 1/4	器面摩滅著しい
183	055-0	土師器 皿	5-23 S K37	19.5	3.7	外面 Pit11	ナデ ナデ	微砂粒少し含む	良	黄橙 7.5YR8/6	1/2	器面荒れ著しい
184	059-0	土師器 皿	5-23 S K37	25.0	—	外面 Pit11	タテハケ (9本/cm) 後ナデ ヨコハケ (9本/cm)	微砂粒少量含む	良	内：にぶい黄橙 5YR6/3 外：にぶい橙 7.5YR7/4	口～胴 1/2	1 線引記号 注目部1条
185	056-04	土師器 皿	5-17 S K30	—	—	外面 Pit11	タテハケ (5本/cm) 後ナデ ヨコハケ (5本/cm)	微砂粒含む	良	白橙 2.5YR8/3	底部 1/6	
186	056-06	須恵器 杯蓋	5-17 S K30	19.0	—	外面 Pit11	ヘラケズリ・ケズリ ヨコナデ	微砂粒含む	良	内：明青灰 5GY7/1 外：灰 N6/0	1/6	
187	056-03	須恵器 杯	5-17 S K30	16.0	4.3	外面 Pit11	ヨコナデ ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 5Y8/1	1/2	
188	057-0	須恵器 杯	5-17 S K30	16.0	—	外面 Pit11	ヨコナデ ヨコナデ	微砂粒少し含む	良	内：灰白 N7/0 外：灰 N4/0	小片	
189	056-07	須恵器 杯蓋	5-24 pit 1	14.8	—	外面 Pit11	ヘラケズリ・ケズリ ヨコナデ	砂粒 (3mm) (～0.2mm)	良	灰白 2.5Y7/1	1/2	大型に分類 重ね焼 ツまみ内側あり

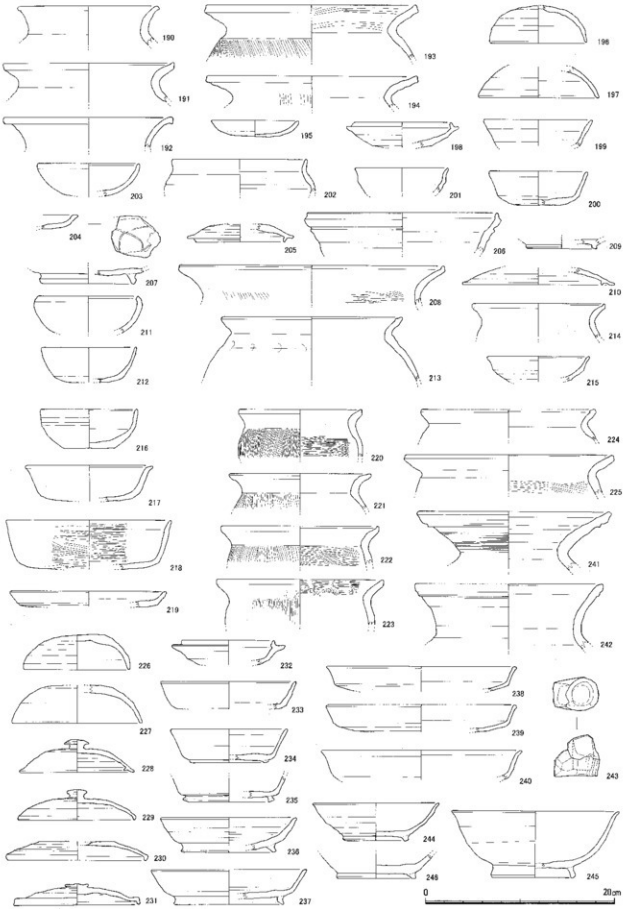
第７表　Ａ地区土器観察表（4）



第32図　ＳＤ６・２・８・14，ＳＨ26，ＳＫ35・30・37，pit出土土器実測図（1:4）

番号	整理番号	遺跡	調査区	遺構	時期	遺物	出土地点	遺構検出面の形態	土壌	色調	質感	備考
92	057-02	1T中央	2号 S区25	3.0	—	縄文 ナデ HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	黒褐 2.5YR2/2	/6	
93	057-08	1T中央	2号 S区25	2.0	—	縄文 ナデ HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	黒褐 10YR3/3	/5	遺構確認難しい
94	057-09	1T中央	2号 S区25	2.0	—	縄文 ナデ HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	黒褐 10YR3/2	/5	遺構確認難しい
95	057-03	1T中央	2号 S区25	3.0	1.3	縄文 ナデ HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	黒褐 2.5YR3/2	/7	
96	057-05	1T中央	2号 S区25	2.0	3.0	縄文 ロクロナデ・ヘラ切り HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/11	小型土器破片多数出土
97	057-05	1T中央	2号 S区25	2.5	—	縄文 ロクロナデ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/8	
98	057-06	1T中央	2号 S区25	2.0	—	縄文 ロクロナデ・ケズリ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	暗灰 5Y4/1	/6	
99	057-07	1T中央	2号 S区25	2.5	—	縄文 ロクロナデ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/10	
100	057-03	1T中央	2号 S区25	2.5	3.0	縄文 ロクロナデ・ケズリ HE ロクロナデ・ケズリ	縄紋時代	楕円形	土	オリーブ黒 2.5GY6/1	/15	
101	058-06	1T中央	2号 S区25	2.0	—	縄文 ロクロナデ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/7	
102	058-06	1T中央	2号 S区25	2.0	—	縄文 ロクロナデ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/12	小型土器破片
103	059-04	1T中央	2号 S区33	2.0	3.5	縄文 ナデ HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰黄褐 10YR5/2	/8	
104	059-02	1T中央	2号 S区33			縄文 ヘラミガキ HE ヘラミガキ	縄紋時代	楕円形	土	灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐 10YR5/2	/8	内面にススとしみ込み
105	059-06	1T中央	2号 S区33	3.5	—	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/10	
106	059-01	1T中央	2号 S区33	2.5	—	縄文 ロクロナデ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N5/0	/10	小型土器破片
107	059-02	1T中央	2号 S区34			縄文 ロクロナデ・ケズリ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/1	/6	
108	059-01	1T中央	2号 S区34	2.0		縄文 ミニハケ（横方向） HE ミニハケ（横方向）	縄紋時代	楕円形	土	灰白 2.5Y8/2 灰白 2.5Y8/2	/16	
109	059-09	1T中央	2号 S区30	—	—	縄文 ロクロナデ HE 未調整	縄紋時代	楕円形	土	オリーブ灰 10Y6/2	不明	内面黒斑しまり
110	059-08	1T中央	2号 S区32	3.5	—	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/14	
111	059-05	1T中央	2号 S区27	2.5		縄文 ナデ HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	黒褐 10YR3/2	/9	
112	059-02	1T中央	2号 S区28	2.0	3.7	縄文 ロクロナデ・ケズリ HE ロクロナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/16	
113	059-05	1T中央	2号 S区	3.0	—	縄文 未調整 HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0	/5	
114	059-01	1T中央	2号 S区23	2.0		縄文 ナデ HE ナデ	縄紋時代	楕円形	土	黒褐 2.5YR3/1	/12	土製不明品
115	059-07	1T中央	2号 S区31	2.0		縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0 灰 N6/0	/8	
116	059-01	1T中央	2号 S区	2.5	4	縄文 ロクロナデ・ヘラ切り HE ロクロナデ・ナデ	弥生	楕円形	土	灰 N5/0	/7	
117	059-02	1T中央	2号 S区	3.5	4.0	縄文 ロクロナデ・未調整 HE ニンデ・ナデ	弥生	楕円形	土	灰 N5/0	/6	小型壺形土器
118	071-04	1T中央	2号 縄文第2層	7.5	5.2	縄文 ミガキ・イボ（横方向）ガキ HE ミガキ	縄紋時代	楕円形	土	黒褐 7.5YR3/2	/8	
119	027-03	1T中央	2号 弥生面	2.5	1.3	縄文 ミニナデ HE ミニナデ・ナデ	弥生	楕円形	土	褐灰 5Y5/1	/4	
120	064-05	1T中央	2号 弥生面	3.0	—	縄文 タテハケ（横方向） HE タテハケ（横方向）	縄紋時代後期	楕円形	土	灰 N6/0 灰 N6/0	/8	
121	064-01	1T中央	2号 縄文第4層	3.0	—	縄文 タテハケ（横方向） HE ナデ	縄紋時代後期	楕円形	土	黒褐 N3/0	/6	
122	064-04	1T中央	2号 縄文第4層	2.5		縄文 タテハケ（横方向） HE ヨコハケ（横方向）	縄紋時代後期	楕円形	土	灰白 黄褐 10YR7/4	/6	
123	064-06	1T中央	縄文第4層・2層	2.5	—	縄文 タテハケ（横方向） HE ナデ（ヨコ・斜方向ナデ）	縄紋時代後期	楕円形	土	灰白 N8/0	/6	
124	028-05	1T中央	2号 弥生面	2.5		縄文 ヘラ HE ヘラ	弥生	楕円形	土	黒褐 2.5Y3/2	/5	赤色顔料塗しまり
125	064-01	1T中央	2号 縄文第4層	3.0	—	縄文 タテハケ（ヘラ） HE ヨコハケ（ヨコ）	弥生	楕円形	土	灰 N6/0	/4	
126	061-02	1T中央	1号 弥生面	3.0	4.7	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ・ハケ切り HE ロクロナデ・ロクロケズリ・ヘラ切り	縄紋時代後期	楕円形	土	灰白 2.5Y7/1	/4	小型土器破片多数
127	055-04	1T中央	2号 弥生面	3.5	4.0	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ・ヘラ切り HE ロクロナデ	弥生後半 (～300)	楕円形	土	灰 N6/0	/5	
128	064-06	1T中央	2号 弥生面	3.0	3.3	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	土師器	楕円形	土	灰 5Y5/1 N5/0 灰 5Y5/1 N4/0	/6	
129	061-10	1T中央	2号 縄文第4層	3.0	3.2	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	縄紋時代後期	楕円形	土	灰 N6/0	/13	
130	061-03	1T中央	2号 縄文第4層	3.0		縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	弥生中期	楕円形	土	灰白 2.5Y8/2	/8	
131	025-03	1T中央	2号 弥生面	3.5	2.2	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	弥生後半 (～300)	楕円形	土	黒褐 2.5Y3/1	/12	
132	061-05	1T中央	2号 弥生面	3.0	—	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	縄紋時代後期	楕円形	土	灰 N6/0 灰 N6/0	/7	
133	064-07	1T中央	2号 弥生面	3.5	3.0	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	弥生	楕円形	土	灰白 N8/0	/7	
134	055-01	1T中央	2号 弥生面	2.5	3.3	縄文 ロクロナデ・ケズリ後ナデ HE ロクロナデ・ケズリ	縄紋時代	楕円形	土	灰白 N8/0	/2	
135	072-03	1T中央	011 縄文第2層			縄文 ロクロナデ・ナデ HE ロクロナデ・ケズリ	縄紋時代	楕円形	土	灰 N6/0 灰 N6/0	/4	
136	064-04	1T中央	2号 弥生面	3.5	3.3	縄文 ロクロナデ・ケズリ HE ロクロナデ	弥生後半	楕円形	土	灰 N5/1	/3	
137	065-02	1T中央	2号 土師器	3.5	3.7	縄文 ロクロナデ・ナデ HE ロクロナデ・ナデ	弥生後半 (～300)	楕円形	土	灰 N6/0	/4	
138	064-01	1T中央	2号 土師器	2.0		縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ・ロクロケズリ	縄紋時代後期	楕円形	土	黒褐 2.5Y3/2	/8	
139	064-07	1T中央	2号 土師器	3.0	—	縄文 ロクロナデ・ロクロケズリ HE ロクロナデ	縄紋時代後期	楕円形	土	灰白 N8/0	/10	
140	065-05	1T中央	2号 縄文第4層	2.0	—	縄文 ロクロナデ HE ロクロナデ	弥生後半 (～300)	楕円形	土	オリーブ灰 5GY5/1	/10	
141	053-06	1T中央	2号 土師器	2.5		縄文 ロクロナデ・ハケメ（横方向） HE ロクロナデ	縄紋時代後期	楕円形	土	黒褐 2.5Y3/2	/5	
142	057-03	1T中央	2号 弥生面	3.0	—	縄文 ロクロナデ HE ロクロナデ	弥生	楕円形	土	灰白 N7/0 7.5YR7/4	/5	
143	057-04	1T中央	2号 弥生面	—	—	縄文 ナデ・ケズリ HE ナデ	縄紋時代後期	楕円形	土	褐灰 10YR4/1	不明	
144	063-06	1T中央	2号 縄文第4層	3.5	4.2	縄文 ロクロナデ・ヨコケズリ HE ロクロナデ・ケズリ	弥生	楕円形	土	灰白 10YR8/1	/4	
145	028-01	1T中央	2号 弥生面	3.5	3.6	縄文 ロクロナデ・ケズリ HE ロクロナデ・ケズリ	縄紋時代	楕円形	砂質	黒褐 10YR3/1	/4	
146	071-06	1T中央	2号 縄文第4層	—	—	縄文 ロクロナデ・ケズリ HE ロクロナデ	縄紋時代後期	楕円形	土	灰 N5/0	石器 ヘラ状ナデ	

第８表　Ａ地区土器観察表（5）



第33図　ＳＫ25・33・34・32・27・28・５・23・31・包含層出土土器実測図（1:4）

甕（126～130）　いずれも頸部から口縁部の破片である。口径は20～28cmであるが、口縁端部の形状はそれぞれ異なる。126は外面に波状文が、129・130にはカキメがみられる。

器台（131）　杯部の破片で、口径35cm前後である。

鉢（132～139）　132・134・135は、口縁部が外反するものである。133は口縁部が短く立ち上がる。136は厚い円盤状の底部で、体部外面はカキメ調整である。137～139は、底部は平底、体部は直線的であり、ケズリによる調整がみられる。

（2）ＳＤ６出土土器（第32図）

①土師器

椀（140～143）　口径11cm、器高3.5cm前後である。口縁端部は尖り気味である。口縁部はヨコナデで、体部外面にはオサエの痕が残る。140の底部の調整はケズリである。

壺（144～149）　144～146は口径16cm程の中型の甕である。147～149は口径22cm程で、長胴甕であろう。

②須恵器

杯蓋（150・151）　天井部から丸味をもって口縁部に続くもので、口径が10cmのもの（150）と12cmの

番号	登録番号	器種	出土位置	法量(cm) 口径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
247	046-07	須恵器 杯蓋	E7 SE11 第2層	14.0	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 5Y5/1	1/4	外面に自然釉付着
248	044-02	須恵器 杯蓋	E7 SE11 上面	15.0	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y7/1	1/8	
249	046-03	須恵器 杯蓋	E7 SE11 第2層	—	—	外面 ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	内：灰白 5Y7/1 外：灰白 N8/0	つまみ完存	
250	044-02	須恵器 杯蓋	E7 SE11 上面	—	—	外面 底部糸切り 内面 ナデ	微砂粒少し含む	ひい	灰白 2.5Y8/1	1/10	
251	044-05	須恵器 杯	E7 SE11 上面	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む	良	灰 N5/0	1/5	
252	046-05	須恵器 杯	E7 SE11 第2層	12.5	4.2	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰白 N8/0	1/4	
253	047-06	須恵器 杯	E7 SE11 第3層	12.4	3.6	外面 ロクロナデ・ヘラ切り後ナデ 内面 ロクロナデ	細砂粒含む	良	灰白 N7/0	1/2	
254	044-04	土師器 甕	E7 SE11 上面	20.0	—	外面 タタハケ(5本/cm) 内面 ナデ	砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/4	小片	
255	047-04	土師器 甕	E7 SE11 第3層	17.0	—	外面 タテハケ(4本/cm) 内面 ナデ	微砂粒含む	良	浅黄橙 10YR8/3	1/10	黒斑
256	048-01	土師器 甕	E7 SE11 第3層	32.0	—	外面 ハケメ 内面 ナデ	細砂粒含む	良	明褐灰 7.5Y7/2	口縁部小片	
257	002-01	土師器 杯	E7 SE11 第3層	13.8	3.2	外面 オサエ 内面 ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/1 にぶい橙 7.5YR7/4	完存	穿孔1か所 内面ヘラ文字「鹿」
258	003-01	土師器 杯	E7 SE11 第3層	13.0	3.1	外面 オサエ後粗いナデ 内面 ナデ	微砂粒含む	良	灰白 10YR8/1 褐 7.5YR4/6	完存	
259	001-01	土師器 杯	E7 SE11 第3層	13.8	3.8	外面 オサエ後粗いナデ 内面 ナデ	微砂粒含む	良	内：灰白 10YR8/1 外：灰白 7.5YR8/2	3/5	口縁端部に墨痕 外面に「法？」の墨書
260	048-02	土師器 杯	E7 SE11 第3層	15.0	—	外面 ヨコナデ・オサエ 内面 ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5YR8/2	1/8	
261	002-02	土師器 杯	E7 SE11 第3層	19.5	3.5	外面 ヨコナデ・ナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/10	内面にヘラ記号「□」あり
262	046-06	土師器 皿	E7 SE11 第2層	16.0	1.7	外面 ヨコナデ・オサエ 内面 ヨコナデ・ナデ	細砂粒含む	良	にぶい黄橙 10YR7/2	1/5	
263	047-01	土師器 皿	E7 SE11 第3層	16.0	2.1	外面 ヨコナデ・オサエ 内面 ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	内：灰黄 2.5Y7/2 外：にぶい黄橙 10YR4/3	1/12	
264	047-02	土師器 皿	E7 SE11 第2層	17.0	3.0	外面 ヨコナデ・ナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/6	
265	047-03	土師器 皿	E7 SE11 第2層	19.5	2.8	外面 ヨコナデ・ナデ 内面 ヨコナデ・ナデ	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/2	1/4	
266	044-07	土師器 皿	E7 SE11 第2層	20.0	2.5	外面 ミガキ・ナデ 内面 ミガキ・ナデ	細砂粒多く含む	良	淡黄 2.5Y8/3	1/5	
267	045-01	土師器 壺	E7 SE11 第4層	26.5	6.0	外面 ナデ後粗いミガキ 内面 ヨコハケ(5本/cm)後絞文(強制状)	微砂粒少し含む	良	橙 5YR7/6	1/4	
268	001-04	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第3層	15.0	5.1	外面 ロクロナデ・ケズリ 内面 ロクロナデ	細砂粒含む(0.5mm)	良	灰白 2.5Y7/1	1/7	外面底部に「大三」墨書あり
269	044-06	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 ロクロナデ・ケズリ 内面 ロクロナデ	微砂粒多く含む	良	内：灰白 N7/0 外：褐灰 10YR6/1	底部5/8	
270	001-03	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第2層	11.6	3.1	外面 ロクロナデ・ナデ(板目痕) 内面 ナデ	細砂粒含む(～0.5mm)	良	内：灰白 10YR7/1 外：灰黄褐 10YR6/2	完存	
271	044-01	灰釉陶器 椀	E7 SE11 上面	14.0	3.5	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 2.5Y8/1	1/3	272と同一個体か 内外施釉(つけがけ)
272	046-04	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第2層	14.0	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 7.5Y8/1	1/8	271と同一個体か 内外施釉(つけがけ)
273	046-01	灰釉陶器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	微砂粒少し含む	良	灰白 7.5Y8/1	1/3	
274	001-02	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	13.6	4.3	外面 ケズリ・ナデ・ヨコナデ 内面 ミガキ	微砂粒含む	良	内：黒 外：灰白 2.5Y8/1	完存	
275	048-04	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	15.0	—	外面 ナデ・ケズリ 内面 ミガキ	細砂粒含む	良	内：黒 N2/0 外：灰白 2.5Y8/1	1/10	
276	048-03	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 不明 内面 ナデ	微砂粒含む	良	内：黒褐 10YR3/1 外：明褐灰 2.5YR7/2	1/12	脚外面に煤または油煙付着
277	046-02	黒色土器 椀	E7 SE11 第2層	—	—	外面 不明 内面 不明	微砂粒含む	良	内：灰 N4/0 外：灰白 2.5Y8/2	1/3	
278	045-03	黒色土器 椀	E7 SE11 第2層	—	—	外面 ナデ 内面 ミガキ	微砂粒多く含む	良	内：黒 N2/0 外：灰白 2.5Y8/2	底部	
279	047-05	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 不明 内面 不明	微砂粒含む	良	灰白 2.5Y8/1	1/2	
280	045-02	黒色土器 椀	E7 SE11 第3層	—	—	外面 ナデ 内面 ミガキ	微砂粒含む	良	内：黒 N2/0 外：灰白 10YR8/2	3/4	

第９表　Ａ地区土器観察表（6）

もの（151）がある。

杯（152～157）　受部を持ち、立ち上がりが短く内傾するものである。

高杯（158・159）　口径12cmで、158は無蓋である。

鉢（160）　厚い円盤状の底部から体部は直線的に上方にのびる。外面にはカキメを施す。

（3）その他の溝出土土器

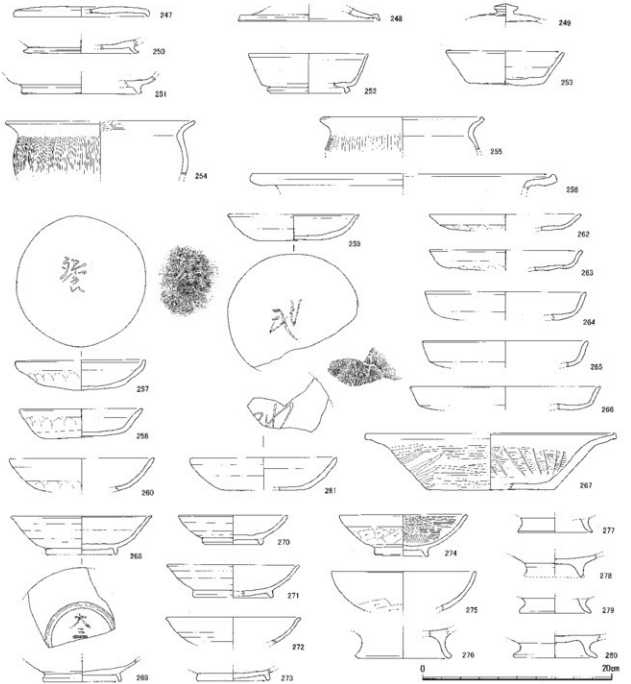
ＳＤ２からは須恵器高杯（161）、灰釉陶器（162）が、ＳＤ８からは須恵器杯蓋（163）が、ＳＤ14からは陶器小椀（164）と山茶椀（165）が、それぞれ出土している。

（4）ＳＨ２６出土土器（第32図）

①土師器

杯（166）　口径13cm程、器高５cmで、口縁部ヨコナデ、外面はオサエである。

皿（167）　口径16cm前後で、口縁部ヨコナデ、外面はオサエである。



第34図　ＳＥ11出土土器実測図（1:4）

甕（168）　口径26cm程の大型の甕である。

②須恵器

杯（169）　底部は平坦で高台が付く。底部外面には墨書がみられる。

（5）ＳＫ３５出土土器（第32図）

①土師器

甕（170～175）　口径14～18cmの中型の甕である。

杯（176）　口縁部ヨコナデ、底部外面はオサエである。

②黒色土器

杯（177～180）　内面全面と外面口縁部が黒色である。口径13～17cmで、外面はオサエ、内面はミガキである。

椀（181・182）　底部の破片である。

（6）ＳＫ３７出土土器（第32図）

①土師器

蓋（183）　口径20cmで、宝珠つまみを持つ。

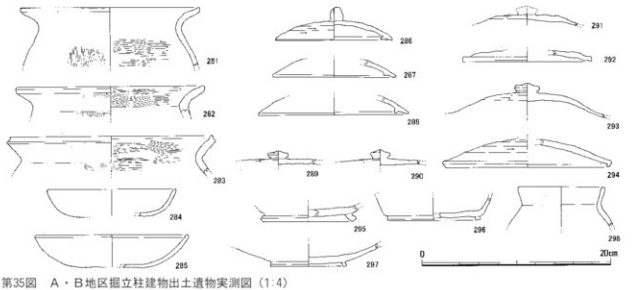
甕（184）　口径25cmで、長胴甕になるものであろう。口縁部ヨコナデ、胴部外面はタテハケ、内面はヨコハケである。

（7）ＳＫ３０出土土器（第32図）

①土師器

番号	登録番号	器種	地区名	出土位置	法量(cm) 口径	器高	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
281	106-02	土師器 甕	A地区	SB103 D11 Pit6	19.2	—	外面 タテハケ(3本/cm) 内面 ヨコハケ(8本/cm)	細砂粒含む (～2.5mm)	良	浅黄橙 10YR8/3	口縁 1/4	
282	104-01	土師器 甕	A地区	SB110 C19 Pit1	20.2	—	外面 タタハケ(8本/cm) 内面 ヨコハケ(7～8本/cm)	砂粒含む (～1.5mm)	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁 1/10	
283	104-02	土師器 甕	A地区	SB111 F19 Pit2	21.6	—	外面 タテハケ(8本/cm) 内面 ヨコハケ(8本/cm)	砂粒含む (～1.5mm)	良	にぶい橙 5YR7/3	口縁 1/10	
284	106-05	土師器 杯	A地区	SB104 D11 Pit7	13.7	3.9	外面 ナデ 内面 ナデ	砂粒含む (～3mm)	良	浅黄橙 10YR8/3	1/3	
285	105-06	黒色土器 杯	A地区	SB106 E33 Pit2	16.3	3.5	外面 不明 内面 ミガキ	砂粒含む (～4mm)	良	内：黒 外：浅黄橙 7.5YR8/3	1/3	
286	107-02	須恵器 杯蓋	A地区	SB107	12.4	3.5	外面 ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～2.5mm)	良	灰 N6/0	1/3	
287	106-07	須恵器 杯蓋	A地区	SB105 D13 Pit10	13.1	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～1.5mm)	良	灰白 N6/0	口縁 1/10	
288	104-06	須恵器 杯蓋	A地区	SB111 F20 Pit1	16.0	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～1.5mm)	良	灰 N6/0	口縁 1/10	
289	105-02	須恵器 杯蓋	B地区	SB117 C30 Pit1	—	—	外面 ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～1mm)	良	灰白 7.5Y6/1	小片	
290	105-03	須恵器 杯蓋	B地区	SB118 B30(31) Pit1	—	—	外面 ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～4mm)	良	灰白 N7/0	小片	
291	104-04	須恵器 杯蓋	A地区	SB110 B19 Pit2	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～3mm)	良	灰 N6/0	小片	
292	106-06	須恵器 杯蓋	A地区	SB105 D12 Pit10	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	微砂粒含む	良	灰 N6/0	小片	
293	105-04	須恵器 杯蓋	B地区	SB122 D33 Pit10	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～1.5mm)	良	灰白 10Y7/1	天井部 1/2	
294	105-05	須恵器 杯蓋	B地区	SB121 D33 Pit1	17.8	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～1mm)	良	灰白 N8/0	1/5	
295	104-03	須恵器 杯	A地区	SB110 B19 Pit2	—	—	外面 ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～2mm)	良	明青灰 5B7/1	底部 1/3	
296	104-05	須恵器 杯	A地区	SB110 D19 Pit4	—	—	外面 ロクロナデ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～1.5mm)	良	灰白 7.5Y7/1	底部 1/3	
297	105-07	灰釉陶器 皿	B地区	SB123 E33 Pit9	—	—	外面 ロクロナデ・ロクロケズリ 内面 ロクロナデ	砂粒含む (～1.5mm)	良	灰白 2.5GY8/1	底部 1/2	
298	107-03	土師器 甕	A地区	SB108 F12 Pit2	9.2	—	外面 不明 内面 不明	砂粒含む (～1.5mm)	良	灰 N6/0	口縁 1/6	

第10表　Ａ・Ｂ地区土器観察表



第35図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物出土遺物実測図（1:4）

甕（185）　頚部の破片である。外面タテハケ、内面はヨコハケである。

②須恵器

杯蓋（186）　口径19cmで、口縁部は下方に折れて終わる。外面天井部はロクロケズリである。

杯（187）　口径16cm、器高４cm程である。底部は平坦で、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。高台の断面は四角形である。

壷（188）　口縁部の小片であるが、口径は16cm前後である。口縁部は大きく外反し、端部は肥厚し外面に面を持つ。

（８）Pit出土土器（第32図）

須恵器杯蓋（189）　口径15cm程であるが歪みが大きい。内面に墨書がみられる。

（９）ＳＫ２５出土土器（第33図）

①土師器

甕（190～１94）　いずれも口頚部の破片であるが、口径15～18cmの中型のもの（190～192）と口径22cm前後の大型のもの（193・194）がある。

小皿（195）　口径９cm程の小皿である。

②須恵器

杯蓋（196・197）　天井部から丸味をもって口縁部に続くものである。内外面ともロクロナデで、196は天井部ヘラ切りである。

杯（198～200）　198は受け部を持ち、立ち上がりが短く内傾するものである。199・200は平坦な底部から体部が直線的に立ち上がるものである。

高杯（201）　杯部の小片である。

短頚壷（202）　口頚部の小片で、外面に沈線が１条みられる。

（10）その他の土坑出土土器（第33図）

ＳＫ33からは土師器椀（203）・皿（204）、須恵器杯蓋（205）・甕（206）が、ＳＫ34からは須恵器杯（207）、土師器甕（208）が、ＳＫ32からは緑釉陶器（209）、須恵器杯蓋（210）が、ＳＫ27からは土師器椀（211）が、ＳＫ28から須恵器杯（212）が、ＳＫ５からは土師器甕（213）が、ＳＫ23からは土師器甕（214）が、ＳＫ31からは須恵器高杯（215）が、それぞれ出土した。

（11）遺物包含層等出土遺物（第33図）

遺物包含層からは土師器（216～225）、須恵器（226～242）、円面硯（243）、灰釉陶器（244・245）、山茶椀（246）が出土した。

（12）ＳＥ１１出土土器（第34図）

①須恵器（247～253）

杯蓋（247～249）　口径15cm程で、口縁部内側のかえりは無く、端部は下方に折れて終わる。宝珠つまみを持つ。

杯（250～253）　底部は平坦で、体部は斜めに直線的に立ち上がる。高台の付くもの（250～252）と付かないもの（253）がある。

②土師器（254～267）

甕（254～256）　口径17～20cmの中型のもの（254・255）と口径32cm前後の大型のもの（256）がある。254・255の胴部外面はタテハケである。

杯（257～261）　口径13～15cmのもの（257～260）と20cm前後のもの（261）がある。口縁部ヨコナデで、外面にはオサエの痕がみられる。257の底部内面にはヘラで「饗」と刻まれており、261の底部内面にもヘラによる文字が刻まれている。また、259の底部外面には「池」の墨書がみられる。

皿（262～266）　口径が16～17cmのもの（262～264）と20cm前後のもの（265～266）がある。

盤（267）　口径27cm程で、底部は平坦、体部は斜めに直線的に立ち上がり、口縁は外反する。外面はミガキ、内面にはハケメと暗文がみられる。

③灰釉陶器

椀（268～273）　口径12～16cm、器高３～５cm程の椀である。高台の断面は三日月形が退化したもので、折戸53号窯式[注9]であろう。268の底部外面には「大三」の墨書がみられる。

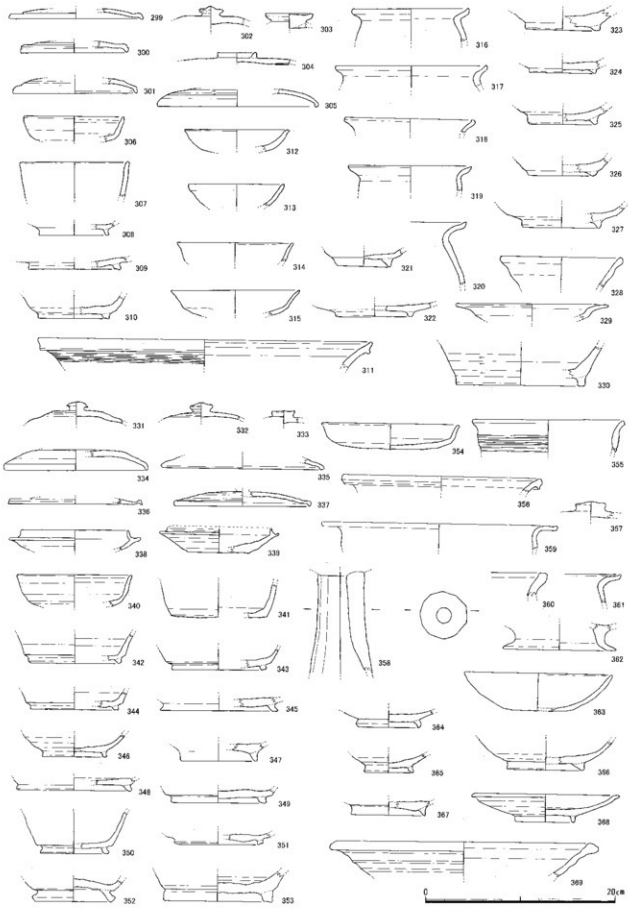
④黒色土器

椀（274～280）　口径13～15cm、高台径７～10cmである。内面はミガキである。

（13）掘立柱建物出土土器（第35図）

第35図にはA地区及びB地区の掘立柱建物出土遺物を図示した。A地区出土のものには、土師器杯（284・285）・甕（281～283・298）、須恵器杯蓋（286～288・291・292）・杯（295・296）があるが、遺物そのものの時期は飛鳥～平安時代である。

（服部芳人・河北秀実）



第36図　B・C地区出土土器実測図（1:4）

番号	登録番号	器　種	地区名	出土位置	備　考
299	073-04	須恵器　杯蓋	B地区	SK42	
300	075-07	須恵器　杯蓋	B地区	SK41	
301	075-01	須恵器　杯蓋	B地区	SK38	
302	075-04	須恵器　杯蓋	B地区	SK38	
303	076-01	須恵器　杯蓋	B地区	SK40	
304	077-01	須恵器　杯蓋	B地区	SK54	
305	077-07	須恵器　杯蓋	B地区	SK53	
306	077-03	須恵器　杯	B地区	SD47	
307	077-05	須恵器　杯	B地区	SD43	
308	077-13	須恵器　杯	B地区	SK58	
309	073-08	須恵器　杯	B地区	SK39	
310	074-04	須恵器　杯	B地区	SK49	
311	076-03	須恵器　甕	B地区	SK38	
312	074-05	土師器　椀	B地区	SK39	
313	075-02	土師器　椀	B地区	SK40	
314	073-07	土師器　杯	B地区	SK42	
315	073-03	土師器　杯	B地区	SK40	
316	073-05	土師器　甕	B地区	SK42	
317	073-09	土師器　甕	B地区	SK42	
318	076-02	土師器　甕	B地区	SK40	
319	075-06	土師器　甕	B地区	SD51	
320	076-04	土師器　甕	B地区	SK38	
321	078-04	土師器　椀	B地区	SD51	
322	077-04	灰釉陶器　皿	C地区	SD59	
323	074-02	山茶椀	B地区	SD49	
324	074-06	山茶椀	B地区	SD49	
325	075-03	山茶椀	B地区	SD51	
326	074-07	山茶椀	B地区	SD49	
327	074-03	山茶椀	B地区	SD49	
328	077-06	山茶椀	B地区	SD43	
329	073-01	灰釉陶器　段皿	B地区	SK42	
330	077-10	陶器　鉢	B地区	SD51	
331	085-02	須恵器　杯蓋	B地区	遺物包含層	
332	079-04	須恵器　杯蓋	B地区	遺物包含層	
333	082-06	須恵器　杯蓋	B地区	遺物包含層	
334	081-02	須恵器　杯蓋	B地区	遺物包含層	
335	085-04	須恵器　杯蓋	B地区	遺物包含層	
336	079-14	須恵器　杯蓋	B地区	遺物包含層	
337	081-11	須恵器　杯蓋	B地区	遺物包含層	
338	080-02	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
339	080-04	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
340	080-05	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
341	083-04	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
342	079-15	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
343	079-06	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
344	081-03	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
345	081-01	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
346	079-01	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
347	081-07	山茶椀	B地区	遺物包含層	
348	081-05	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
349	081-09	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
350	085-03	須恵器　杯	C地区	遺物包含層	
351	083-06	須恵器　杯	B地区	遺物包含層	
352	083-02	須恵器　壷	B地区	遺物包含層	
353	082-03	須恵器　壷	B地区	遺物包含層	
354	079-13	須恵器　皿	B地区	遺物包含層	
355	079-03	須恵器　鉢	B地区	遺物包含層	
356	080-07	須恵器　甕	B地区	遺物包含層	
357	082-05	土師器　蓋	B地区	遺物包含層	
358	080-08	土師器　高杯	B地区	遺物包含層	
359	079-12	土師器　甕	B地区	遺物包含層	
360	084-04	須恵器　甕	B地区	遺物包含層	
361	083-08	土師器　甕	B地区	遺物包含層	
362	080-06	土師器　椀	B地区	遺物包含層	
363	080-01	黒色土器　椀	B地区	遺物包含層	
364	081-12	灰釉陶器	B地区	遺物包含層	
365	079-06	灰釉陶器	B地区	遺物包含層	
366	083-03	灰釉陶器　椀	B地区	遺物包含層	
367	081-08	山茶椀	B地区	遺物包含層	
368	083-01	灰釉陶器　皿	B地区	遺物包含層	
369	082-01	陶器　鉢	B地区	遺物包含層	

第11表　B・C地区土器一覧表

2　B・C地区の土器

①掘立柱建物出土の土器（第35図）

B地区の掘立柱建物出土の土器には須恵器杯蓋（289・290・293・294）、灰釉陶器皿（297）があり、時期は奈良時代から平安時代である。

②土坑および溝出土の土器（299～330）（第36図）

土坑および溝からは、須恵器杯蓋（299～305）・杯（306～310）・甕（311）、土師器椀（312・313・321）・杯（314・315）・甕（316～320）、灰釉陶器皿（322・329）、山茶椀（323～328）、陶器鉢（330）が出土した。

③遺物包含層出土の土器（331～369）（第36図）

遺物包含層からは、須恵器杯蓋（331～337）・杯（338～346・348～351）・壷（352・353）・皿（354）・鉢（355）・甕（356・360）、土師器蓋（357）・高杯（358）・甕（359・361）・椀（362）、黒色土器椀（363）、灰釉陶器（364～366・368）、山茶椀（347・367）、陶器鉢（369）が出土した。

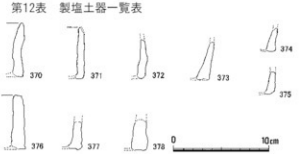
④製塩土器（370～378）（第37図）

製塩土器（370～378）はいずれもB地区出土で、いわゆる志摩式製塩土器である。小片であるが、器高は5～6cmで、口径は20cm程度になるものであろう。器壁は薄手のもの（370～375・377）と厚手のもの（376・378）がある。

（服部芳人・河北秀実）

番号	登録番号	器　種	地区名	出土位置	備　考
370	108-04	製塩土器	B地区	D33　Pit 7	
371	108-07	製塩土器	B地区	E34　包含層	
372	108-06	製塩土器	B地区	D30　SK40	
373	108-09	製塩土器	B地区	C35　包含層	
374	108-01	製塩土器	B地区	C32　Pit 2	
375	108-02	製塩土器	B地区	E34　Pit 4	
376	108-03	製塩土器	B地区	D32　Pit 7	
377	108-05	製塩土器	B地区	E34　Pit 8	
378	108-08	製塩土器	B地区	C33　包含層	

第12表　製塩土器一覧表



第37図　B地区出土製塩土器実測図（1:4）

3　瓦

出土した瓦は、軒丸瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鴟尾など200点近くあるが、破片がほとんどである。大半はA地区で出土し、特にＳＤ１に集中する。B地区のＳＤ49・51でも出土した。

①軒丸瓦（379・380）（第38図）

２点ともにA地区ＳＤ１出土である。379は蓮弁は単弁８葉で、子葉はない。外区および内区外縁に１条の圏線がめぐる。中房の蓮子は、１＋６の配置である。各蓮弁の輪郭線は間弁によって離され、重なることなくそれぞれ別個に蓮弁を囲む。瓦当裏面上部に丸瓦端面を押し当てて接合したものと思われる。瓦当径16.5cm、中房径4.5cmである。380は破片であるが、379と同范の可能性が高い。これらの軒丸瓦は、津市大里窪田町付近で採集されたとされる軒丸瓦と外縁に違いはあるものの蓮華文は類似する。いわゆる山田寺系の軒丸瓦である。７世紀中葉のものであろうか。

②丸瓦（381～385）（第38図）

平瓦に比べ、全体的に個体数は少ない。成形技法に差異は認められず、凹面に布目を残し、凸面にナデ調整を行う。381は狭端面と側面の角を２cm程カットする。厚手のもの（381～384）は凹面の布目痕が６～８本／cmと粗く、薄手のもの（385）は布目痕が10本／cmと細かい。383は布目のつなぎ目痕跡が明瞭に残る。384は玉縁付近の破片である。

③平瓦（386～391・393～403）（第38～40図）

布目痕が両面にあるⅠ類と布目痕が凹面にあるⅡ類に分けられる。

Ⅰ類　386の１点だけである。凹面には７本／cmの布目が残り、模骨痕跡を縦方向にナデ消す。凸面には横方向のケズリおよびナデにより消されるが凹面よりやや粗い布目痕跡が部分的に確認できる。

Ⅱ類　387～391・393～403は凸面の縄目タタキをなで消すａ類と縄目タタキを残すｂ類に分けられる。

ａ類（387～391・393～398）　凸面縄目タタキは横方向にナデ消され、明瞭に残るものは少ない。凹面には模骨痕跡をナデ消すもの（388～391・393）と、ハケ状の工具で掻き取るもの（394～398）があるが、共に10本前後／cmのやや粗い布目痕跡を残す。389の凹面には、模骨痕跡のくいちがいが確認でき、枠板を継ぎ足して成形した可能性がある。また、広端面に植物痕跡が残る例（390・391）、薄手で模骨痕跡を棒状の工具でナデ消すもの（393）もある。

ｂ類（399～403）　ａ類の縄目タタキに比べると目がやや細かい感がある。ｂ類も凹面の布目痕を残すもの（399～401）と、布目痕をナデ消すもの（402・403）がある。400は縄目タタキの板の痕跡が残り、約２cm幅の板である。ｂ類の平瓦の凹面には、模骨痕跡は明瞭に確認できず、側面のケズリは２回にわたって施される。また凸面のタタキは縦方向に施されるなど１枚作りの可能性がある。

④道具瓦（第39～41図）

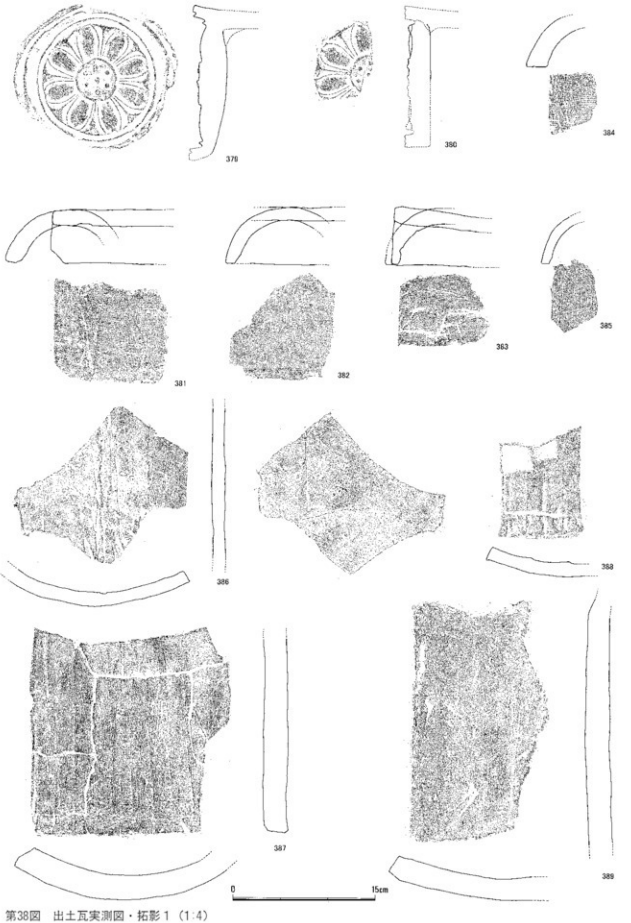
ア　**熨斗瓦**（392）

平瓦を幅18cmに截断したものである。技法的にはⅡａ類に含まれるものである。

イ　**鴟尾**（404～413）

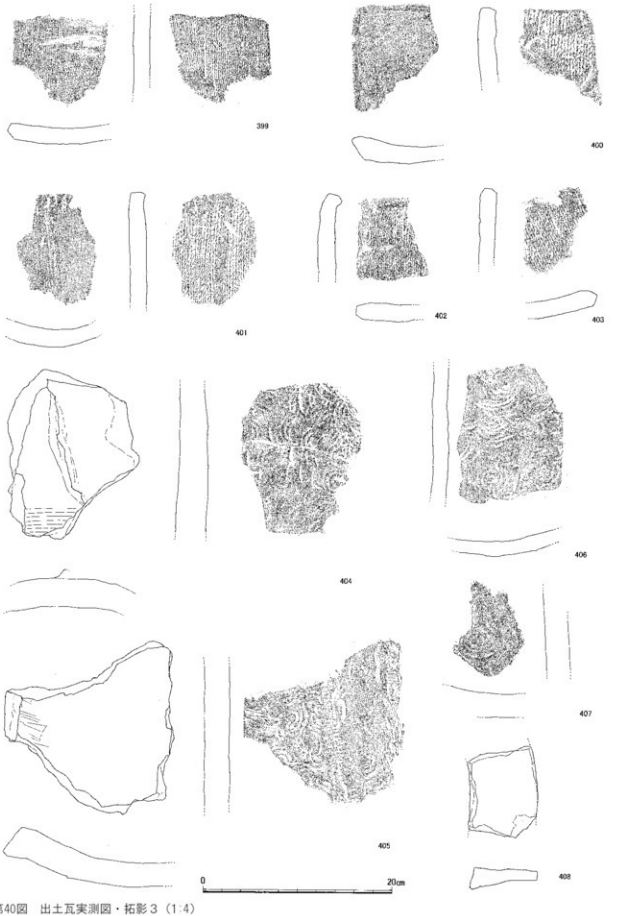
厚さ２cm程で、その多くは凹面に同心円の当て具痕が残る。409の凸面には格子タタキがみられ、また404・410・411には凸面に高さ１cm程の粘土が貼り付けられている。いずれも小片のため断定はできないが、鴟尾の可能性がある。

（服部芳人）



第38図　出土瓦実測図・拓影１（1:4）

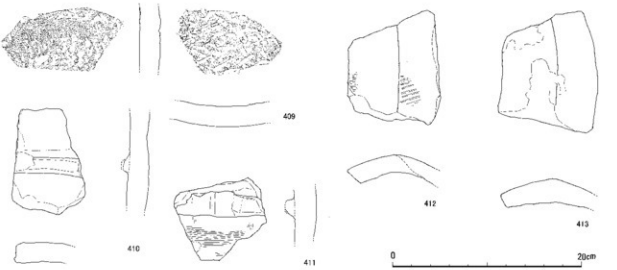
第39図　出土瓦実測図・拓影２（1:4）



第40図　出土瓦実測図・拓影３（1:4）

番号	登録番号	出土位置	成形		側面ケズリ	厚さ	色調	焼成	備考
			凸面	凹面					
381	096-01	B6 SD1	平行タタキ後ナデ	布目8本/cm	1回	1.7	褐灰	良好	隅切り
382	095-01	D1 包含層	ナデ	布目8～10本/cm	2回	1.5	褐灰	良好	
383	095-02	B10 SD1	ナデ	布目8本/cm	1回	1.5	赤褐	良好	
384	096-03	B10 SD1	ナデ	布目6本/cm	1回	1.9	暗橙	良好	
385	093-02	B9 SD1	ナデ	布目10本/cm	1回	1.0	暗橙	良好	
386	086-01	C8 SD1	布目7本/cm後ナデ	布目7～10本/cm後ナデ	1回	1.5	灰	良好	
387	098-01	C7 SD1	ナデ・ヘラ状工具で掻き取る	布目8～10本/cm後ナデ	1回	2.6	暗橙	良好	
388	101-02	D4 SD1	縄目タタキ後ナデ	布目8本/cm後ナデ	1回	1.3	灰黄	良好	
389	103-01	D2 SD1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ナデ	2回	2.4	淡黄	良好	
390	009-01	包含層	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ナデ	1回	1.9	灰白	やや軟	
391	102-01	D4 SD1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ナデ	1回	1.6	淡黄橙	良好	
392	102-02	C7 SD1	ナデ	布目後ナデ	1回	1.8	淡黄橙	良好	型斗瓦
393	101-03	C7 SD1	ナデ	布目10本/cm後ナデ	2回	1.0	灰白	良好	
394	097-01	D4 包含層	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.8	淡黄橙	良好	
395	099-01	C7 SD1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.7	灰	良好	
396	100-01	C9 SD1	縄目タタキ後ナデ	布目10本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.4	灰白	良好	分割截面
397	099-02	D33 包含層	縄目タタキ後ナデ	布目9本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.6	灰白	良好	
398	101-01	C8 SD1	縄目タタキ後ナデ	布目11本/cm後ハケ状工具で掻き取る	1回	1.6	灰白	良好	
399	094-01	D9 SD1	縄目タタキ	布目6本/cm	2回	1.8	淡黄橙	良好	
400	094-02	D31 SD49	縄目タタキ	布目9本/cm	2回	1.8	暗黄橙	良好	
401	093-01	B12 包含層	縄目タタキ	布目8本/cm	1回	1.8	灰	良好	
402	093-03	E2 包含層	縄目タタキ	布目6本/cm後ナデ	2回	1.8	暗橙	良好	
403	096-02	C6 SD1	縄目タタキ	布目後ナデ	2回	1.7	灰白	良好	
404	091-01	包含層		布目、同心円		2.2	青灰	良好	
405	090-01	B6 包含層		布目、同心円		2.6	青灰	良好	
406	087-01	D2 SD1 第1層	ナデ	布目8本/cm、同心円		1.5	灰	良好	
407	092-01	C14 包含層		布目、同心円		2.5	灰白	良好	
408	088-02	包含層	ナデ	ナデ、指圧痕		1.2	暗緑灰	良好	
409	087-02	E7 SE11 第3層	格子タタキ	同心円		2.1	灰白	良好	
410	089-02	包含層	ナデ、工具のあたり			2.2	灰白	良好	
411	089-03	D4 包含層				2.2	淡黄橙	良好	
412	088-03	C5 SD1 第2層	タタキ	ナデ	1回	1.8	灰	良好	粘土板製ぎ痕
413	089-01	C6 SD1 第1層	タタキ	同心円	1回	2.4	灰	良好	

第13表　瓦一覧表



第41図　出土瓦実測図・拓影４（1:4）

4　木製品

木製品はＡ地区のＳＤ６およびＳＥ11から出土した。

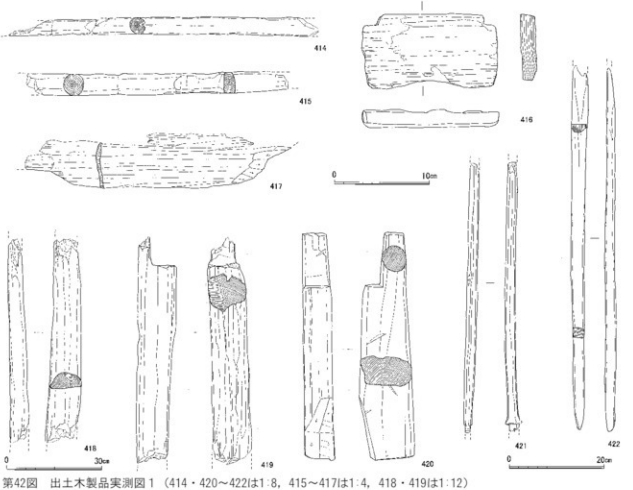
ＳＤ６出土遺物　棒（414・415・422）、不明木製品（416・417）、建築部材（418～420）、杙（421）がある。

ＳＥ１１出土遺物　皿（423）、蓋板（424）、底板（425～431）、檜扇（432）、不明木製品（433～435・437・438）、鞘（436）、棒（439～444）、櫛（445）がある。櫛（445）は、背部が直線的な形状であり、歯の数は８本／cmである。

（服部芳人・河北秀実）

番号	登録番号	名　称	出　土　位　置	法　量（cm）			木取り	樹　種	備　　考
				長さ	幅	厚さ			
414	仮2	棒	E6　SD6	65.0	4.9	3.1	芯材	樹皮	加工痕あり
415	仮3	棒	E4　SD6（3層）	27.6	3.7	2.0	芯材		
416	仮4	不明	D2　SD6（3層）No.12	14.3	7.8	1.7	板目	スギ	
417	仮6	不明	E4　SD6（3層）No.39	27.8	5.7	1.0		ヒノキ属	加工痕あり
418	仮9	建築部材	D2　SD6（3層）No.6	64.0	10.0	5.2	辺材	コウヤマキ	
419	仮5	建築部材	D2　SD6（3層）No.5	71.3	13.5	12.2	辺材		
420	仮7	建築部材	SD6（3層）No.2	48.0	10.7	6.0	辺材	ヒノキ属	
421	仮8	杙	E4　SD6（3層）No.38	55.7	2.8	1.7	辺材		
422	仮10	棒	D3　SD6（3層）No.14	76.5	3.4	1.8	柾目	コウヤマキ	
423	仮26	皿	E7　SE11（3層）No.3，8	20.6	16.2	0.8	板目	スギ	刳り物
424	仮25	蓋板	E7　SE11（3層）	11.5	11.7	1.0	板目	ヒノキ属	曲げ物，縁に孔あり（4つ）
425	仮23	底板	E7　SE11（2層）No.6	15.8	7.6	0.6	柾目	ヒノキ属	曲げ物
426	仮17	底板	E7　SE11（3層）	15.7	1.9	0.6	柾目	ヒノキ属	曲げ物
427	仮31	底板	E7　SE11（3層）	15.4	6.2	0.6	柾目	ヒノキ属	曲げ物
428	仮29	底板	E7　SE11（3層）	15.1	4.8	0.7	柾目	スギ	曲げ物
429	仮32	底板	E7　SE11（3層）	15.8	5.5	0.7	柾目	スギ	曲げ物
430	仮13	底板	E7　SE11（3層）	14.9	6.0	0.7	柾目	ヒノキ属	曲げ物
431	仮12	底板	E7　SE11（3層）	13.6	3.3	0.6	柾目	ヒノキ属	曲げ物
432	仮33	檜扇	E7　SE11（3層）No.15	30.7	4.9	0.4	柾目	針葉樹	孔あり

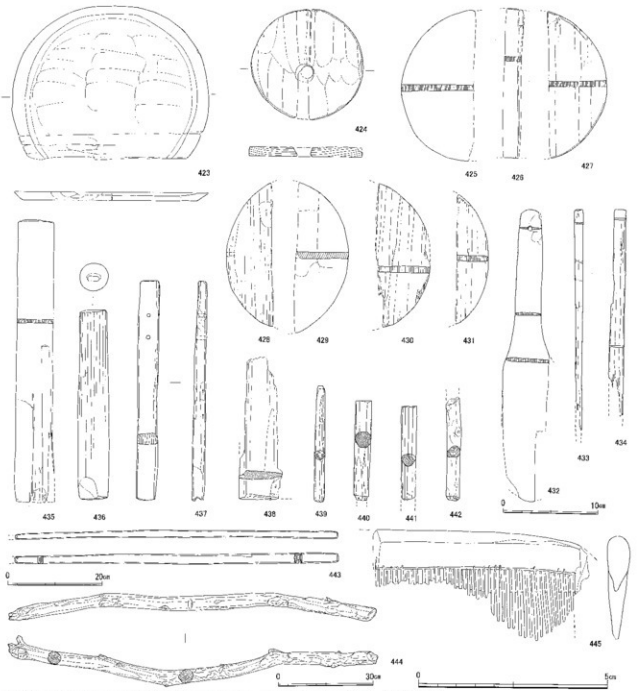
第14表　木製品観察表（1）



第42図　出土木製品実測図１（414・420～422は1:8，415～417は1:4，418・419は1:12）

番号	登録番号	名　称	出　土　位　置	法　量（cm）			木取り	樹　種	備　考
				長さ	幅	厚さ			
433	仮18	不明	E7　SE11（3層）	23.2	0.9	0.1	柾目	ヒノキ属	
434	仮11	不明	E7　SE11（3層）	21.7	1.6	0.2	柾目	ヒノキ属	
435	仮28	不明	E7　SE11（3層）No.9	29.7	3.8	0.4	柾目	ヒノキ属	
436	仮36	鞠	E7　SE11（3層）No.10	19.9	3.3	2.8	芯材？	広葉樹	刀子の鞘か？
437	仮27	不明	E7　SE11（3層）	23.1	2.1	1.2	柾目	スギ	円孔あり（2つ）
438	仮15	不明	E7　SE11（3層）	15.0	4.5	0.9	追柾目	スギ	
439	仮24	棒	E7　SE11（3層）	12.2	1.1	1.0	辺材	スギ	面取りあり
440	仮19	棒	E7　SE11（3層）	10.5	1.8	1.6	辺材	ヒノキ属	面取りあり
441	仮20	棒	E7　SE11（3層）	9.9	1.7	1.3	辺材	ヒノキ属	面取りあり
442	仮14	棒	E7　SE11（3層）	10.9	1.7	1.1	辺材	広葉樹	面取りあり
443		棒	E7　SE11（3層）No.27	67.7	2.0	1.4	辺材	スギ	
444		棒	E7　SE11（2層）	115.1	3.9	3.8	芯材	マツ属複維管束亜属	
445	仮22	櫛	E7　SE11（4層）	5.7	2.8	0.6			8本/cm

第15表　木製品観察表（2）



第43図　出土木製品実測図２（423～442は1:4，443は1:8，444は1:12，445は1:1）

Ⅴ　結語

1　掘立柱建物群

掘立柱建物は、Ａ地区で13棟、Ｂ地区で11棟、Ｃ地区で３棟検出した。これらの建物のうちＡ地区の12棟とＢ地区の８棟については、出土遺物、柱穴の切り合い関係、棟方向、柱筋の関係、建物間の距離などを検討して、第Ⅰ～Ⅳ期に分けた。

第Ⅰ期はＡ地区のＳＢ102・108、Ｂ地区のＳＢ115・119の４棟で、棟方向はN24～26°Ｗである。出土遺物は土師器・須恵器の小片であるが、ＳＢ102が奈良時代の竪穴住居ＳＨ26を切っており、第Ⅰ期の時期は奈良時代としておくのが妥当であろう。

第Ⅱ期はＡ地区のＳＢ104・106・110～112、Ｂ地区のＳＢ116・118の７棟で、棟方向はＳＢ104・106・111・116・118がN26～28°ＷまたはそれＳに直交しており、ＳＢ110・112がN33°Ｗまたはそれに直交している。飛鳥時代および奈良時代の遺物が出土しているが、第Ⅱ期の時期については奈良時代と考えられる。

第Ⅲ期はＡ地区のＳＢ101・103・107・109、Ｂ地区のＳＢ117・121・122の６棟で、棟方向はN27～30°Ｗまたはそれに直交しているが、ＳＢ103のみN23°Ｗと少し振れる。Ａ地区の建物からの出土遺物の時期は奈良時代であり、Ｂ地区ＳＢ122のそれは奈良時代から平安時代前半である。したがって、第Ⅲ期の具体的な時期については、Ａ地区のＳＢ101・103・107・109を第Ⅲａ期として奈良時代末頃、Ｂ地区のＳＢ117・121・122を第Ⅲｂ期として平安時代前半と、少し時期幅をもって考えるのが妥当であろう。なお、ＳＢ121とＳＢ122は建て替えであり、Ｂ地区の中でさらに二時期に分かれると考えられる。

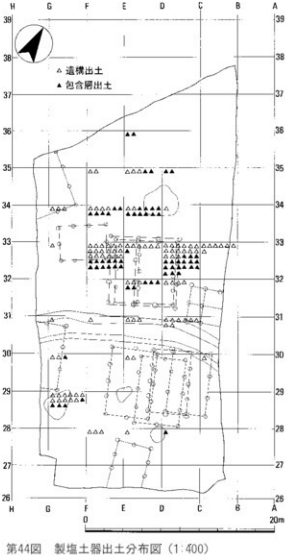
第Ⅳ期はＡ地区のＳＢ105、Ｂ地区のＳＢ123の２棟であるが、棟方向が異なっており、さらに時期が分かれる可能性がある。第Ⅳ期の時期については、出土遺物から平安時代中頃と考えた。

Ⅰ～Ⅳ期の建物は、N22～35°Ｗの範囲内で収まるものであり、規模が比較的大きく、しかも整然と計画性をもって建てられている。これらの建物に対して、Ｂ地区北端のＳＢ124とＣ地区ＳＢ125～127の４棟は方位を異にしており、時期差があるか、あるいは性格の異なる建物群であろう。

2　製塩土器

Ｂ地区では、志摩式製塩土器が多数出土した。図示したのは９点（370～378）であるが、細片も含めると遺構からは93点、包含層からは73点、計166点が出土した。出土分布状況を第44図に示したが、ＳＢ121～123の柱穴やその上面の包含層から多く出土している。

志摩式製塩土器は志摩地方で生産され塩とともに消費地に流通するものであるが、その多くは伊賀地方や中南勢地方の奈良・平安時代の集落跡で出土している。志摩式製塩土器についてはいくつかの研究[12]があるが、消費地では竪穴住居や土坑から出土する例が多いとされている。窪田大垣内遺跡でもや



第44図　製塩土器出土分布図（1:400）

はり土坑から出土しているが、掘立柱建物やその周辺からも多数出土しており、消費地における製塩土器の使用や廃棄の実態を考えるうえでの一資料となった。

3　周辺の遺跡と古代集落

窪田大垣内遺跡では棟方向が揃った奈良・平安時代の掘立柱建物を検出した。また、遺物では官衙遺跡で多数出土するといわれている緑釉陶器、ヘラ書き土器、墨書土器、円面硯、土馬などのいわゆる特殊遺物や瓦が出土した。同時代の掘立柱建物群やこうした遺物は、近隣の安養院跡、橋垣内遺跡、六大B遺跡、六大A遺跡でも確認されている。

安養院跡[145]では奈良・平安時代の掘立柱建物が検出されており、緑釉陶器耳皿や円面硯なども出土している。安養院跡の建物群のなかには棟方向が窪田大垣内遺跡の建物とほぼ一致するものもあり、一連の遺跡と考えてよいであろう。

六大B遺跡[146]では、奈良～平安時代の大型の掘立柱建物が多数検出されており、特に平安時代前半の建物がその規模、棟数とも卓越している。また、出土遺物も円面硯、土馬、墨書土器、刻書土器、緑釉陶器、石帯、瓦、ミニチュア土器などがある。こうしたことから古代官衙関連遺跡と考えられており、地方の富豪層の居館もしくは下級官衙と想定されている。

橋垣内遺跡[147]では、古代の掘立柱建物が検出されたが、飛鳥時代から奈良時代を中心とした建物群である。円面硯、陶馬、墨書土器なども出土している。

六大A遺跡[148]では、奈良～平安時代の大型の掘立柱建物が多数検出されている。出土遺物も円面硯、土馬、墨書土器、瓦、緑釉陶器などがある。

大里窪田町一帯の古代集落や郡衙等の問題についてはすでに既刊の報告書[149]で検討されているが、当地域での発掘調査が一段落した現在、窪田大垣内遺跡も含めて、掘立柱建物の規模、規格性、方位や位置関係などを今一度、整理して総合的に検討する必要がある。

（服部芳人・河北秀実）

〔註〕

（1）三重県教育委員会『大和街道伊勢別街道伊賀街道　―歴史の道調査報告書―　』1983

（2）三重県埋蔵文化財センター『橋垣内遺跡（県道A～C地区）発掘調査報告　研究紀要第18―3号』2009

（3）三重県埋蔵文化財センター『窪田大垣内遺跡（第2次）発掘調査報告』1997

（4）三重県埋蔵文化財センター『窪田大垣内遺跡（第3次）・菅ヶ谷古墳群発掘調査報告』1997

（5）津市教育委員会『安養院跡発掘調査報告』1990

（6）主なものには下記の文献がある。

　a．三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報　Ⅲ』　1991

　b．〔註〕（3）に同じ

　c．三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う　橋垣内遺跡発掘調査報告』　1997

　d．三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う　六大A遺跡発掘調査報告』　2002

　e．〔註〕（2）に同じ

（7）a．三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路（8工区）建設事業に伴う　六大A遺跡発掘調査報告（木製品編）』2000

　b．〔註〕（6）dに同じ

　c．三重県埋蔵文化財センター　『六大A遺跡発掘調査報告　―資料分析・遺物観察表・写真図版編―』2003

（8）三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路（9工区）建設事業に伴う　六大B遺跡（B～I地区）発掘調査報告』2006

（9）a．〔註〕（6）cに同じ

　b．〔註〕（2）に同じ

（10）〔註〕（5）に同じ

（11）田辺昭三『陶邑古窯址群　Ⅰ』　平安学園考古クラブ　1966

（12）灰釉陶器の編年については、主として下記の文献を参考にした

　a．橋崎彰一ほか『愛知県猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告（1）』愛知県教育委員会　1980

　b．藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館　1982

　c．斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」『月刊　考古学ジャーナル№211』　ニュー・サイエンス社　1982

　d．橋崎彰一ほか『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ）』愛知県教育委員会　1983

（13）a．新田洋「三重県における製塩に関する予察（1）」『三重考古　第3号』1980

　b．山本雅靖「志摩式製塩土器考」『考古学論集　第3集』1990

　c．野口美幸「内田遺跡出土の志摩式製塩土器」『Mie history vol.6』三重歴史文化研究会　1993

　d．萩原義彦「伊勢における製塩土器について」『研究紀要　第14号　―創立15周年記念論文集―』三重県埋蔵文化財センター　2005

（14）〔註〕（5）に同じ

（15）〔註〕（8）に同じ

（16）a．〔註〕（2）に同じ

　b．〔註〕（6）cに同じ

（17）〔註〕（6）dに同じ

（18）〔註〕（6）eに同じ

Ａ地区全景（北上空から）

ＳＤ６（東から）

ＳＤ６西壁土層断面図（東から）

ＳＤ６木製品出土状況（東から）

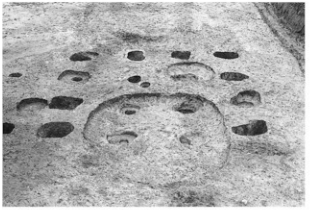
ＳＨ26（東から）

ＳＢ102～105（南から）

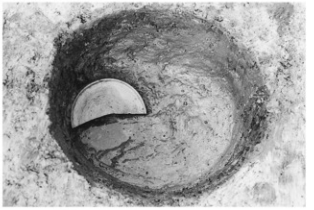
ＳＢ108・109・111（南から）

ＳＢ101（南から）

ＳＢ106・107（南から）



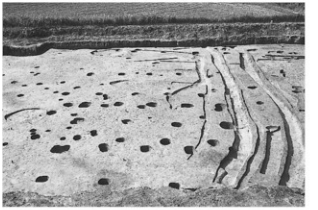
ＳＢ110，ＳＫ34（南から）



Ｅ24pit１遺物出土状況（西から）

ＳＥ11（西から）

Ｂ・Ｃ地区全景（北上空から）



ＳＢ115～119，ＳＤ49・51（東から）

ＳＢ121・122（東から）

ＳＢ122　pit遺物出土状況（西から）

2

35

36

37

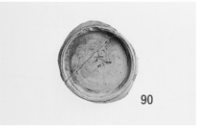
38

44

46

63

88


90

100

122

132

166

189

257

259

268

379

423

445

報 告 書 抄 録

ふ り が な	くぼたおおがいといせき（だいいちじ）はっくつちょうさほうこく
書　　名	窪田大垣内遺跡（第１次）発掘調査報告
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	研究紀要
シリーズ番号	18－５
編 著 者 名	服部芳人・山口積也・河北秀実
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　TEL　0596-52-1732
発 行 年 月 日	西暦　2009年３月

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
窪田大垣内遺跡	三重県津市 大里窪田町字池の下	201	a813	34度45分50秒	136度29分31秒	19930506～19931216	3,150	平成５年度主要地方道津関線道路改良事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
窪田大垣内遺跡	集落跡	古墳～平安時代	竪穴住居・掘立柱建物井戸・溝・土坑	土師器・須恵器・陶器円面硯・土馬・瓦・木製品	

要　　約	奈良～平安時代の掘立柱建物を26棟検出し、出土遺物や棟方向などから、時期変遷を追うことができた。 出土遺物には、土馬、円面硯、墨書土器、瓦などがある。

窪田大垣内遺跡（第１次）発掘調査報告

研究紀要第18－5号

2009(平成21)年３月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　光出版印刷株式会社